

松任市北安田北遺跡 III

松任市千代野ニュータウン拡張工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告

1990

石川県立埋蔵文化財センター

松任市北安田北遺跡 Ⅲ

松任市千代野ニュータウン拡張工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本報告書は石川県松任市北安田町地内に所在する北安田北遺跡の第3次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、石川県住宅供給公社の千代野ニュータウン拡張工事に係るもので、4次に亘る発掘調査が実施されている。第1・2・4次の発掘調査は松任市教育委員会が担当、実施している。第3次発掘調査の対象面積は3,100m²で、昭和62年9月7日から12月4日まで現場作業を実施した。
- 3 本遺跡の第3次発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センター（福島正実、西野秀和）が担当し、井上俊平（石川県立埋蔵文化財センター調査員）の協力を得た。
- 4 調査の実施に当たっては、石川県住宅供給公社、松任市教育委員会、地元松任市民の助言、協力を受けた。
- 5 本遺跡出土遺物の整理作業は、平成元年度に石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。遺物整理作業に従事したのは次の各氏である。

小星玲子 戸瀬かがり 村井由紀子 渡辺洋子

なお、遺構実測図の整理、縄文土器の実測は担当者が実施した。

- 6 本報告書の編集、執筆は福島正実の助言を受けて、西野秀和が行った。
- 7 本遺跡の第3次調査に係る遺構・遺物実測図、現場写真、出土遺物などの資料は、本センターにて一括し、保存保管に当たっている。
- 8 本報告書の遺構・遺物の挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものは挿図内に明示した。
 - (1) 遺構挿図の方位は全て磁北を表示する。
 - (2) 遺構挿図の水平基準は、海拔高で表示した。（単位 m）
 - (3) 挿図の縮尺（竪穴式住居址、掘立柱建物跡1/60、土坑1/40、土器・石器1/3）
 - (4) 写真図版の遺物の縮尺は任意のもので、統一していない。
 - (5) 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図に使用したものと同じである。

目 次

I 地形と周辺の遺跡	
1 地形	1
2 周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯と経過	5
III 層序と遺構の配置	
1 層序	6
2 遺構の配置	6
IV 遺構	
1 積穴式住居址	11
2 掘立柱建物跡	18
3 土坑	22
4 溝	26
5 河道跡	28
V 遺物	
1 遺構出土遺物	30
2 包含層出土遺物	43
3 縄文時代の遺物 他	45
VI まとめ	48

挿 図 目 次

第1図 松任市の位置	1	第17図 第11・12・17号上坑 (1/40)	25
第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)	2	第18図 溝断面図 (1/40)	27
第3図 第3次調査区の位置	4	第19図 河道跡平面図 (1/200)	29
第4図 第3次調査区全体図 (1/300)	7	第20図 河道跡断面図 (1/80)	29
第5図 主な遺構配置図 (1/300)	8	第21図 住居址出土遺物 (1) (1/3)	31
第6図 グリッド配置図 (1/300)	9	第22図 住居址出土遺物 (2) (1/3)	32
第7図 調査区東北壁断面図 (1/80)	10	第23図 土坑出土遺物 (1) (1/3)	34
第8図 第1～4号住居址 (1/60)	12	第24図 土坑出土遺物 (2) (1/3)	35
第9図 第5～7・9号住居址 (1/60)	13	第25図 溝出土遺物 (1) (1/3)	37
第10図 第8・11号住居址 (1/60)	14	第26図 溝出土遺物 (2) (1/3)	38
第11図 第10・12・13号住居址 (1/60)	16	第27図 柱穴出土遺物 (1/3)	40
第12図 第1・2号掘立柱建物跡 (1/60)	19	第28図 包含層出土遺物 (1) (1/3)	41
第13図 第3・4号掘立柱建物跡 (1/60)	20	第29図 包含層出土遺物 (2) (1/3)	42
第14図 第5号掘立柱建物跡 (1/60)	21	第30図 縄文土器 (1) (1/3)	44
第15図 第2～6号土坑 (1/40)	23	第31図 縄文土器 (2) (1/3)	45
第16図 第7～10・14号土坑 (1/40)	24	第32図 打製石斧 (1/3)	46

図版目次

- | | | |
|-------------------------------------|-----------|-------------------------------------|
| 図版1 航空写真（西から） | 航空写真（北から） | 図版14 第5号土坑 第6号土坑 第9号土坑 |
| 図版2 航空写真（西から） | 航空写真 | 図版15 第10号土坑 第14号土坑 第17号土坑 |
| 図版3 航空写真（東側） | | 図版16 第2A溝 |
| 図版4 航空写真（西側） | | 図版17 第2A溝 第4B溝断面 第2C溝須恵器
出土状況 |
| 図版5 全景（北から） | 全景（北から） | 図版18 第4A溝断面図 第4A溝断面 河道跡 |
| 図版6 調査風景 | | 図版19 河道跡 同断面 同肩部の縄文土器出土状
況 |
| 図版7 第1号住居址 第2・3号住居址 第4号
住居址 | | 図版20 縄文包含層の発掘風景 同完掘状況 縄文
土器の出土状況 |
| 図版8 第5号住居址 第7号住居址 第8号住居
址 | | 図版21 出土遺物（1）（4～49） |
| 図版9 第9号住居址 第10号住居址 第12号住居
址 | | 図版22 出土遺物（2）（52～112） |
| 図版10 第11号住居址 第11～13号住居址 第13号
住居址 | | 図版23 出土遺物（3）（88～139） |
| 図版11 第3号掘立柱建物 第4号掘立柱建物 第
5号掘立柱建物 | | 図版24 出土遺物（4）（143～161） |
| 図版12 柱穴227土器出土状況 土器出土状況 土
器出土状況 | | 図版25 出土遺物（5）（164～203） |
| 図版13 第2号土坑 第3号土坑 第4号土坑 | | 図版26 縄文土器（207～226） |
| | | 図版27 打製石斧 |
| | | 図版28 打製石斧・砥石 他 |

I 地形と周辺の遺跡

1 地形

北安田北遺跡は、石川県松任市北安田町地内に所在する縄文時代から中世にかけて断続的に営なされた複合集落遺跡である。現状の集落の中間に位置する水田地帯の中で、奈良・平安時代の集落が良好な遺存状態を保っていた。

石川県は日本海に突出する能登半島と室津白山に育まれた加賀地域とに分かれ、古代から地形の特質を織り込んだ独特の地域文化が育成されてきた。低平な丘陵地形から成る能登半島は日本海の幸に恵まれているが、高山、大河がなく樹枝状に入り組んだ狭小な谷平野が生活の基盤となった為に、横の繋がりを欠く小地域に分断された閉鎖的な社会が維持していたと言える。一方の加賀地域は県境を走る白山山系から流れ出る中小河川が複合して沖積平野を形成し、加賀農倉地帯を形成している。手取川を始めとして河川の開発事業を紐帶とした広域的な発展を辿ることができる地域である。

松任市は県の中央部からやや南側、加賀平野の北半に位置し、北は金沢市、東は野々市町、鶴来町、南は川北町、美川町と接し、西は海岸砂丘を置いて日本海に限られている。市域の面積は約60平方kmで、標高2,702mを測る雲峰白山から流れ出る県下第一の河川、手取川が形成した典型的な扇状地形の扇央部と扇端部を占めている。松任市の成立は昭和45年（1970）で、現在の人口は約5.5万人である。水田耕作を主とする農業が主産業であったが、北陸自動車道、国道8号線の改築、広域農免農道の開通などを軸として、近年は金属工業を中心とした工場団地や金沢市の近郊ということで住宅団地などが相次いで建設される一方、隕場整備事業が進んでいて、散村的な集落景観が大きく変貌を遂げつつある地域である。

北安田町は市街地の西に位置し、世帯数178の散村状の形態を持つ集落で、野木川（川島用水）が東から北西に向けて日本海に注いでいる。標高10mを測る水田地帯であったが千代野ニュータウンの建設によって大きく変貌を遂げている。地形は南から北へ、東から西へ傾斜しているが、きわめて緩やかである。

北安田北遺跡は、東から西に向けて流れる大川の北側に隣接する位置で東西方向に伸び広がる形を取るものと考えられ、千代野ニュータウン建設に係る緊急発掘調査地区は、遺跡の南半部を占めているものと推定される。

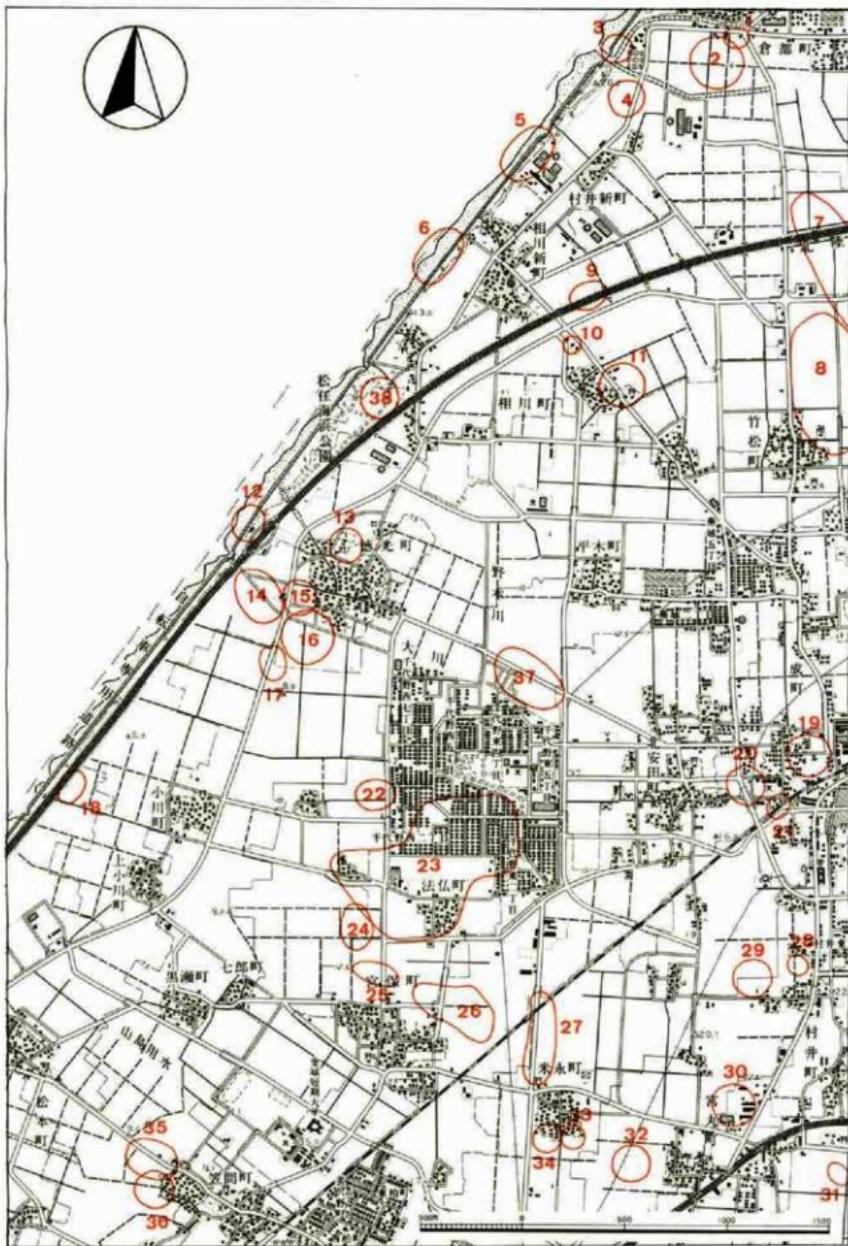
2 周辺の遺跡

手取扇状地の扇尖部、扇端部を占めている松任市・石川郡野々市町は、県下でも有数の遺跡が密集している地域のひとつであるが、近年の開発事業に伴なう緊急発掘調査が多数実施されている地区もある。発掘調査や分布調査の進展によって新たな遺跡や範囲が拡大した遺跡などが扇端部付近で著しく増加している。扇状地の開発は、暴雨川の異名を持つ手取川との戦いであったと言われている。それは扇尖部での占墳時代以前の遺跡の稀薄なことに示されているが、拠点的な集落址は考えにくいと言うことであり、全くの空白地域ではないと考えられる。

縄文時代では晩期後半の良好な資料が出土している長竹遺跡が東方約4kmに、打製石斧の製作跡が検出された野々市町東田遺跡が東方約6kmに位置している。また、後期の井口Ⅱ式土器、八日市新保式土器を出土した一塚遺跡は北東方向約3.5kmに、晩期の御経坂式土器を出土した八田中ヒエモンド遺跡が同じく北東方向約3.5kmに位置する。



第1図 松任市の位置



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

周辺の遺跡地名表（「石川県遺跡地図 1980」に掲る）

No	県 No	遺 跡 名	所 在 地	現 況	時 代	出 土 品
1	1195	倉部出戸遺跡	松任市倉部町284	平地・水田	古墳	須恵器、高杯
2	1196	倉部船跡	" "	"	室町	
3	1194	倉部川遺跡	" " 329	"	不詳	土師質土器
4	1192-93	浜松遺跡	" 竹松町浜竹松	"	古墳、奈良	須恵器
5	1190-91	相川新柳田川遺跡	" 相川新町	平地・砂丘	弥生、古墳	土器片
6	1189	浜相川相川新遺跡	" 相川新町	"	弥生	土器片
7	1197	竹松遺跡	" 宮永町	平地・水田	古墳	萬杯、埴輪器
8	6706	竹松C遺跡	" 竹松町	"	不詳	
9	1187-88	相川新A・B遺跡	" 相川新町	平地・砂丘	古墳	
10	1188	御手洗川遺跡	" 相川町	平地・水田	古墳	
11	1185	相川船跡	" "	"	室町	五輪塔
12	1162	徳光遺跡	" 徳光町	海岸・砂丘	绳文	究形品土器
13	1165	人和隼人館跡	" "	平地・水田	不詳	
14	5150	徳光ヨノキヤマ遺跡	" "	"	弥生・中世	土器、白磁、青磁
15	1163	徳光遺跡	" "	"	不詳	五輪塔
16	1164	アベノ顕証寺跡	" "	"	不詳	
17	1166	聖興寺跡	" "	平地・宅地	室町	五輪塔
18	1160-61	小川新遺跡	" 小川町	海岸・砂丘	古墳・中世	
19	1168	出城城跡	" 成町	平地・水田	室町	宝蓋印塔
20	1167	安田三郎惟光館跡	" " 164	"	不詳	
21	6702	成町遺跡	" "	"	中世	須恵器、土師器
22	6700	番出・高松遺跡	" 宮保町番出	"	平安・中世	須恵器、青磁
23	1159	法仏遺跡	" 法仏町	平地・宅地	平安	
24	1158	鶴丸遺跡	" 宮保町	平地・水田	不詳	
25	6699	宮保遺跡	" "	"	平安	土器
26	1156-57	光明寺跡	" "	"	安土・桃山	
27	1129-30	北出遺跡	" 米永町	"	平安	須恵器、上層器
28	1155	中村遺跡	" 村井町	"	平安	須恵器
29	1154	村井備中守館跡	" "	"	室町	
30	1133	高畠紋左エ門館跡	" 宮丸町	平地・宅地	室町	
31	1134	延寿寺跡	" 村井町馬渡	平地・水田	不詳	五輪塔
32	1131-32	宮丸遺跡	" 宮丸町	"	平安	須恵器、十面器
33	1127	古屋敷遺跡	" 米永町	"	平安	須恵器
34	1128	高山遺跡	" "	"	平安	
35	1125	賀施寺跡	" 笠間町	"	不詳	
36	1126	笠間兵衛家次館跡	" "	"	室町	
37		北安田北遺跡	" 北安田町	平地・宅地	绳文～中世	
38		浜相川B遺跡	" 相川町	平地・園地	弥生	

じく北東方向約4kmに、立地している。さらに、北東方向には北陸地域後・晩期の土器編年の標準遺跡である金沢市中屋遺跡・八日市新保遺跡、野々市町御経塚遺跡や金沢市米泉遺跡などが扇状地扇端部を占地して営まれている。一塙遺跡では幅約4.5mの河道路が発見された他、河道を集落内に取り込んでいる状態が検出された御経塚遺跡、米泉遺跡、八日市新保遺跡などの作り方は往日して考えねばならない。自然堤防上の立地として推定されてきた平野部の遺跡が、発掘によって確認されたのである。また、河道路であることから植物質の遺物の検出が、丘陵上の遺跡に比較して良好であり今後の調査に期待が持たれる。

弥生時代の柴山出土式土器を出土した扇尖部の遺跡としては南東方向約6kmの野々市町上林遺跡を上げるにとどまるが、扇端部の地下水自噴地帯では御経塚遺跡、横江A・E遺跡、下安原海岸遺跡などでの検出が知られているが、さらに東方の金沢市域では矢木ジワリ遺跡、矢木ヒガシウラ遺跡の発掘が金沢市教育委員会によって実施され、柴山出土式土器と中期の小松式土器の間を埋める七器群の内容をめぐって問題提起がなされている。北方向約1.5kmに位置している浜相川遺跡では大量の土器、木製品、植物遺体と共に櫛が出土している。材質がノリウツギで歯数28本、幅6.3cmを測るもので、櫛の皮状のものが螺旋状に歯を堅縛している。古墳時代の櫛とは歯をU

字状に曲げるという共通点が認められる。中期段階の堅穴式住居址の検出は少なく、集落の構造や集落相互の関係など不明の部分が多く、今後に期待されている。弥生時代後半から古墳時代前期にかけての集落遺跡は、南方約0.5kmに位置している後期の標識土器を出土した法仏遺跡を始めとして、松任市域、野々市町域で数多くの発掘調査が実施されている。14棟の堅穴式住居址を検出した御経塚ツカダ遺跡、県下最大の堅穴式住居址が発見された御経塚遺跡、墳丘を削平されていたが前方後方墳を含む12基以上の古墳が検出された御経塚C遺跡、また、玉造関係の遺物が出土した松任市旭小学校遺跡、方形周溝墓から前方後方墳、四隅突出墳までの難起的な墓制がたどられる一塙遺跡群などの発掘から地域史を大きく変換させる成果が集積されつつある状況と言える。

奈良・平安時代においても学史的に重要な位置を占めている松任市三浦遺跡、東大寺領横江庄遺跡を説明する勢いで発掘調査が進展している。横江庄遺跡は昭和45年に石川県鉄工団地が造成されるに当たって金山顧光、吉岡康暢らによって緊急調査が実施され、扇を持つ掘立柱建物を中心として計画的に配置された4棟以上の建物跡が検出され、「三宅」と書かれた墨書き土器の発見から庄家跡と推定された。その後、工場団地の拡張や圃場整備に係る発掘調査によって、庄家跡の東側に隣接した広大な遺跡が確認されている。炭化した切を伴出した倉庫群や庄家跡と時期的に後続する土師器等の発見から、庄家の成立や廃絶についての再検討が考えられている。三浦遺跡出土の土器は三浦下層土器（弥生時代）、中層土器（奈良時代）、上層土器（平安時代）と分けられ、北加賀地域の基準資料として位置付けられてきた。現代はさらに細別が検討されているが、編年の基本的な位置に変化なく、扇状地層尖部の開発に文献的な検討を加えた報告とともに重要な遺跡である。

本遺跡の南方に位置する法仏遺跡は、奈良時代の堅穴式住居址40棟余り、平安時代を盛期とする掘立柱建物跡64棟が発見されていて、県内屈指の集落遺跡である。集落の構造や変遷、位置付けについては未報告である。本遺跡の在り方について直接的に関わるものとして重要な遺跡である。

参考文献

- 古岡康暢編 1967 「加賀三浦遺跡の研究」 石川県・松任町教育委員会
- 中島俊一 1975 「安養寺遺跡群発掘調査概報」 石川県教育委員会
- 湯尻修平 1975 「安養寺遺跡群（上林地区）調査報告書」 石川県教育委員会
- 高一男 1976 「松任市徳光ヨノキヤマ遺跡」 石川県教育委員会
- 中島俊一 1977 「松任市長竹遺跡発掘調査報告書」 石川県教育委員会
- 中島俊一 1982 「松任市上二口遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 吉田淳 1982 「野々市町御経塚ツカダ遺跡発掘調査概報」 野々市町教育委員会
- 古岡康暢編 1983 「東大寺領横江庄遺跡」 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 高尾勝喜編 1983 「野々市町御経塚遺跡」 野々市町教育委員会
- 浜野伸雄編 1984 「松任市横江A遺跡発掘調査報告書」 石川県立埋蔵文化財センター
- 吉田淳 1984 「御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書！」 野々市町教育委員会
- 戸淵幹夫 1984 「松任市宮永遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 三浦純夫 1986 「劍崎遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 三浦純夫 1987 「米光萬福寺遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 木田清 1987 「松任市横江A遺跡」 松任市教育委員会
- 木田清 1987 「松任市一塙オミナクチ遺跡」 松任市教育委員会
- 久田正弘 1988 「八田中遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 前田清彦 1988 「松任市竹松C遺跡」 松任市教育委員会
- 木田清 1988 「松任市八田小鶴遺跡」 松任市教育委員会
- 木田清 1989 「松任市中村ゴケダ遺跡」 松任市教育委員会



第3回 第3次調査区の位置

II 調査に至る経緯と経過

千代野ニュータウン造成計画は昭和40年代の終わり頃から進められ、法仏遺跡の発見、発掘の契機となった事業である。昭和60年にはいりニュータウンの北側と南側に住宅用地を拡張する計画が、石川県住宅供給公社から石川県立埋蔵文化財センター、松任市教育委員会に示された。南側地区は遺跡地図に登載されている法仏遺跡の範囲に含まれ、北側についても遺跡が立地する可能性が高い地区と推定されたので、試掘調査を実施する必要が考えられた。昭和60年7月9日から15日まで、松任市教育委員会が両地区について分布調査を実施し、双方に埋蔵文化財が所在する事が判明した。法仏地区では古代の集落遺跡、北安田北地区では古墳時代後期から古代の集落遺跡が推定された。分布調査の成果を受けて、調査主体者と年次別の発掘面積をどのようにするかの協議が持たれた。

昭和61年度は北安田地区の西端部分、約6,100m²について、松任市教育委員会が発掘調査の計画をたてた。6月19日から12月26日まで現地作業を行い、補足調査部分を含めて発掘調査面積は、7,600m²である。北安田北遺跡第1次発掘調査である。古墳時代後期から平安時代にかけての集落址、堅穴式住居址50棟以上、掘立柱建物跡56棟以上、多数の溝跡等が発見されている。

昭和62年度から埋蔵文化財センターが調査主体者として加わり、年次別全体計画の3分の1の面積を担当することで協議が持たれた。発掘地区は前年度調査区に隣接する地区であるが、県関係事業の計画の中では8月以降とならざるをえないもので、先行して現地調査が実施できる松任市教育委員会が昭和60年度に隣接する6,000m²を担当する事とし、センターはさらに東側3,000m²について、発掘調査計画を立案することとなった。9月1日から現地作業をはじめ、12月2日に終了した。北安田北遺跡第3次発掘調査事業である。センター事業分で検出した遺構は、弥生時代堅穴式住居址1棟、奈良・平安時代の堅穴式住居址14棟と掘立柱建物5棟および多数の溝である。また、編文時代晩期の遺物包含層が検出できたのは大きな成果であった。

昭和63年度は、北安田北遺跡の事業実施区域約6,000m²については松任市教育委員会が担当し（北安田北遺跡第4次発掘調査）、法仏遺跡の3,000m²をセンターが発掘調査を実施した（法仏遺跡第1次発掘調査）。

平成元年度は法仏地区の残り約9,000m²を松任市教育委員会とセンターとで分割して、発掘調査を実施した（法仏遺跡第2・3次発掘調査）。

また、同年に北安田北遺跡第3次発掘調査に係る遺物整理事業を、石川県埋蔵文化財保存協会に委託し、実施した。

現地作業参加者

調査補助員 井上俊平、宮村信一郎

作業員 坂田進午、村田清子、西村みどり、坂井かず子、西川愛子、宮田ハル、中柴みゆき、高村松子、高峰春子、竹山くに子、中堀愛子、蓮田一雄、竹内千鶴子、谷野喜代子、西村元嘉、宮本芳雄、来間清一、近藤康二、澤 甚作、大蔵次政、宮子 寛、大蔵仁政、大蔵誠一、成清暁道、藤 勝子、木村信子、川端美智子、宮川美代子、蓮田貞子、森山英子、西村初枝、宮下清作、作田信吉、西村幸一、宇田川光治、串田吉茂、小西敬三、西田長次、藤田勇蔵、神保正美、高下芳雄、上田正一、村上勝治、最里健太郎

遺物整理参加者（石川県埋蔵文化財整理協会）

洗 浄 浅井勝郎、岡本 晃、前田すみ子、小野澄江、末富しげ子

復 元 勝島栄藏

実 測 戸瀬かがり、渡辺洋子、村田由紀子、小尾玲子

III 層序と遺構の配置

1 層序

北安田北遺跡の分布範囲は松任市教育委員会が行った試掘調査によって、東西方向および南端部が押さえられているが、北方向の伸びについては不明である。本遺跡が縄文時代から平安時代までの複合遺跡であり、それの中核地区が異なっているためである。調査区の南側を小河川の大川が東から西方向に流れ、徳光集落を抜けて日本海にそそいでいるが、調査区域そのものが河岸段丘に立地していると断定はできない。しかし、微地形的には地表面が10~20cmの範囲で細かくローリングしているのを見ることができ、地山そのものも黄褐色砂質土が広範囲に拡がっているが、北地区では疊層が露出し灰黄褐色土となるところや、南東端部では地山の黄褐色砂質土上の検出面と同じ高さで砂疊層が拡がっているところや、南地区では砂の粒子が細かくなって粘質となるところが見られるなどの違いを指摘することができる。発掘区全体では、南北方向で地表面の標高差は約20cmを測り、大川の流れている南方向に低くなっている。

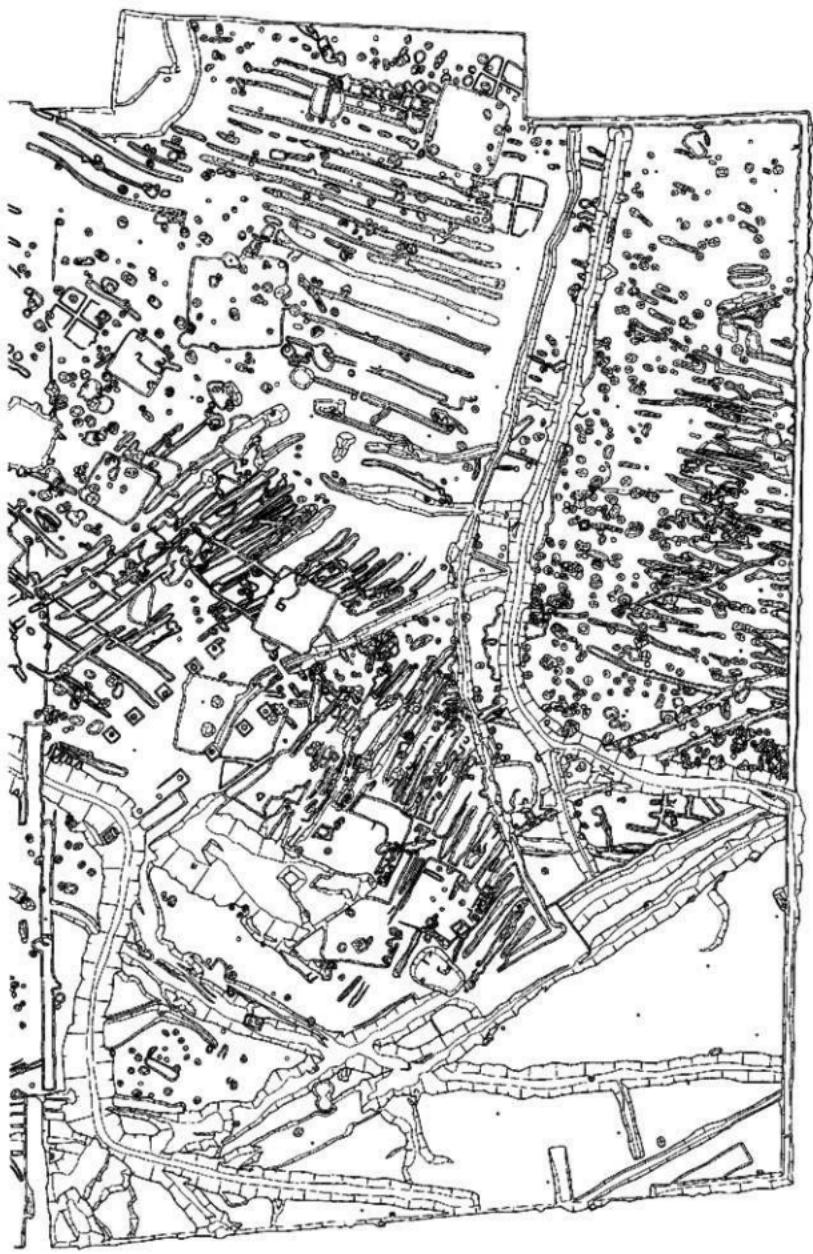
層序は比較的単純であるが、地表面が細かくローリングしているために包含層そのものは水平位置の堆積をとってはいない。現在の水田耕作土は20~30cmの厚さで暗灰色を呈し、淡黄褐色の床土が10~15cmの厚さで敷かれている。その下位には黄褐色砂質土5~10cmが、薄黄褐色砂質土10cmがほぼ水平位置で堆積している。古代の遺物を包含している暗褐色砂質土は、これらの下位に20~30cmの層厚をもって堆積しているが、北方向では層厚はほとんど認められない。さらに下位の黄褐色砂質土との境は入り組むような形で小さくローリングしている。

地表面で検出した畑作用の歴史と推定される規則的に配置された構から想定されるように、耕作によるところの攪乱が全体を覆っていると言える。それは遺物の出土状況からも推定できる事で、復元可能な土器は地山に掘り込まれた作居址、土坑、柱穴、溝の覆土等に限定されるのが通例で、該溝の覆土からは細片となったもので占められていた。弥生時代以前では、発掘区の北東端部で古代の地山とした黄褐色砂質土に縄文土器が含まれていたが、散発的な出土状況であり遺構が存在した可能性は低いものと考えられたが、縄文土器は古代の大溝と複合する形で検出した弥生時代の河道跡肩部に一括品が見られたことから、河道跡が縄文時代からのもので周辺に集落址が所在していることは想像に難くないと言える。縄文時代の包含層が通常の黒褐色を呈していない在り方は、松任市旭遺跡群イチノツカ地区においても類似した状況が見られ、扇状地扇端部の縄文時代後・晩期の集落址の特徴として考えることができるようだ。明確な包含層が形成できないことは、比較的短期の集落址であり（キャンプサイト）、また、洪水などによる不安定な環境であったことを推定させるものである。

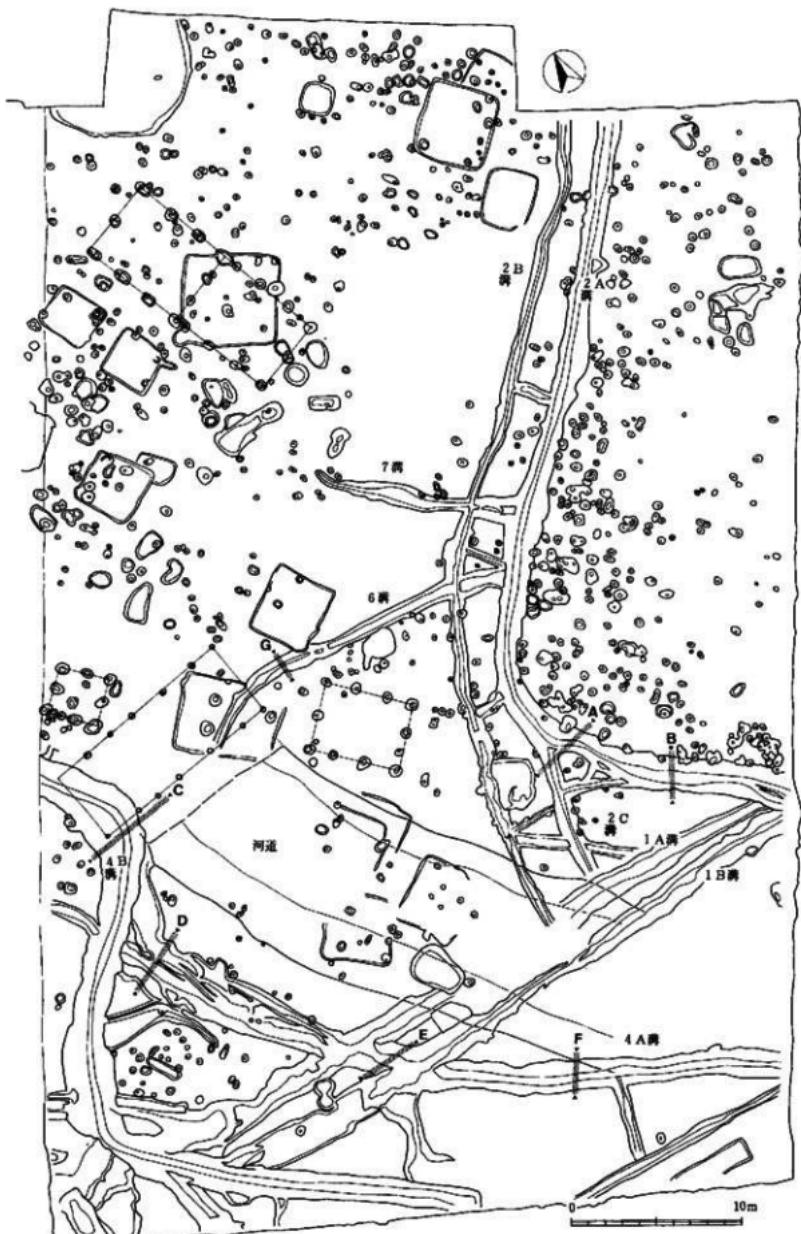
2 遺構の配置

調査グリッドは5m方形で、松任市が第1・2次調査で設定したグリッドを延長させる形で設定した。南北にはほぼ沿う方向にX軸、東西方向にY軸を置き、交差した北東隅でグリッド名を表示した。北西隅は295X220Yグリッドで、北東隅は270X255Yグリッド、南西部は240X185Yグリッドという形で、遺物の取り上げをおこなった。住居址、土坑、溝などの遺構の名称は検出順によって番号を振り、溝はSD、土坑はSXを頭に付けて遺物を取り上げたが、本報告では作居址と同じ様に番号のみで記述している。

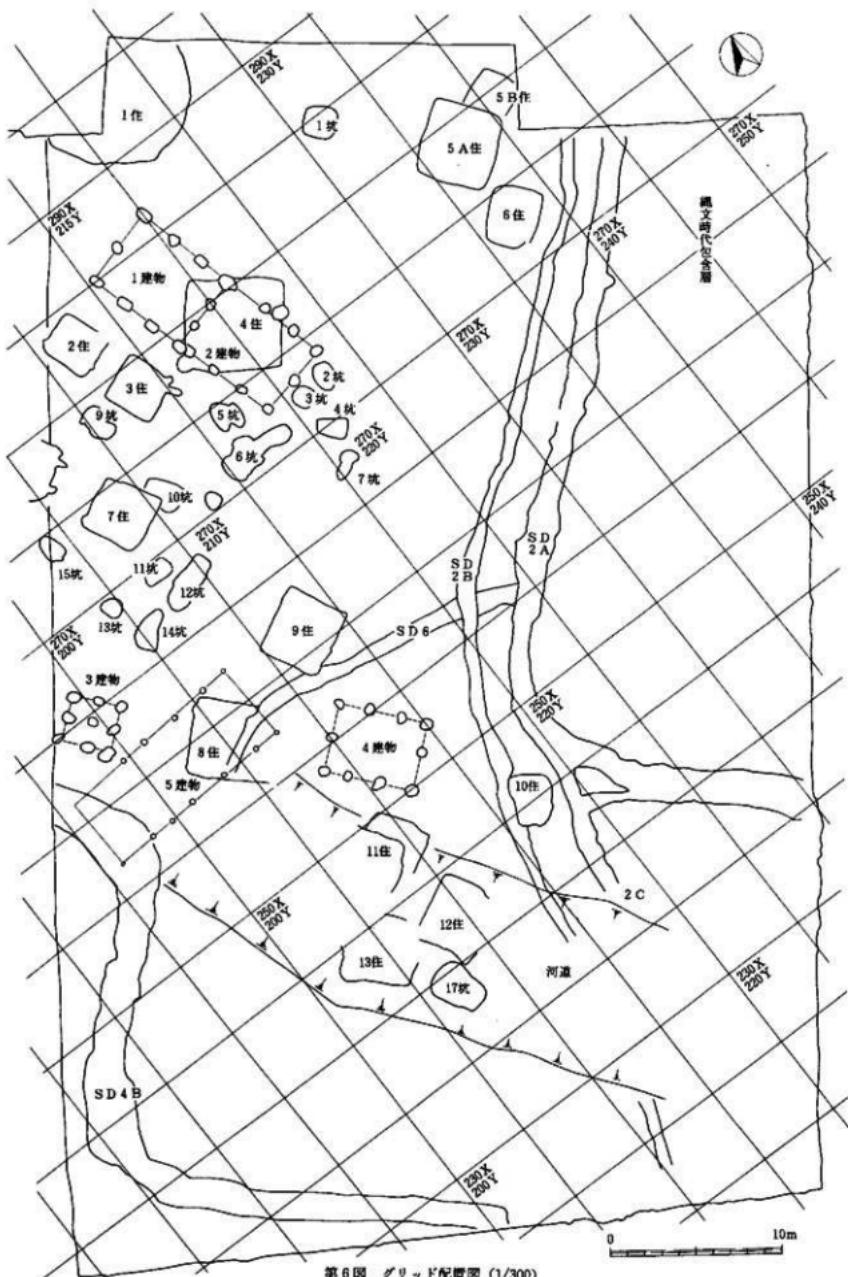
検出した遺構は、堅穴式住居址15棟、掘立柱建物跡5棟、土坑20基、河道跡1、溝、ピット多數にのぼり、全体図では調査区域全面が遺構で覆われる状態となるが、住居跡や掘立柱建物跡を抜き出した形では、やや稀薄な遺構配置となる。丘陵上の限定された範囲での配置と異なり、比較的空間を取り易い平地での配置状況を示していると言える。弥生時代後期の堅穴式住居址1棟を除いて、他の堅穴式住居址は3~5棟単位でまとまるように



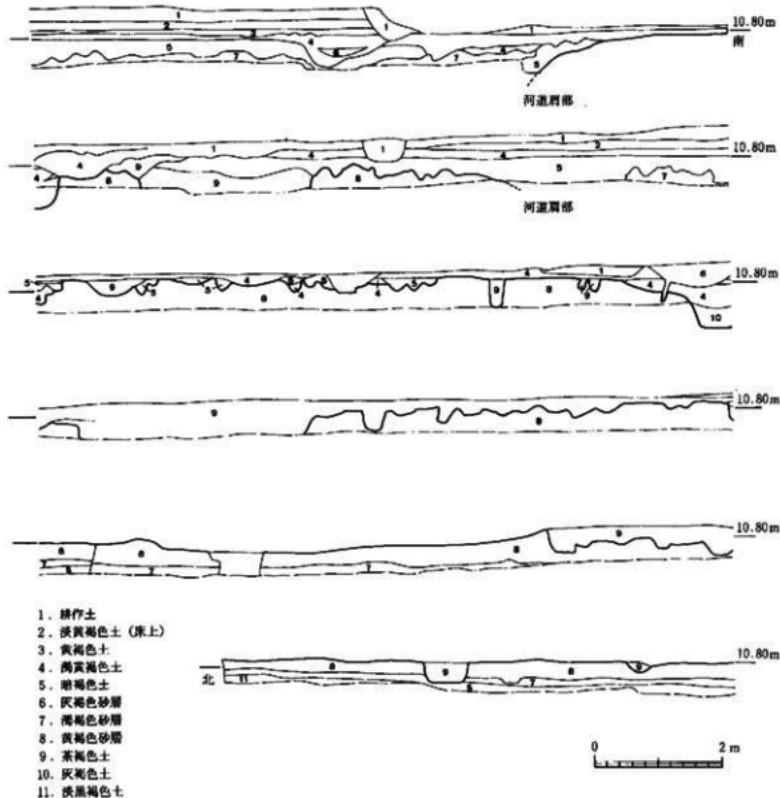
第4図 第3次調査区全体図 (1/300)



第5図 主な遺構配置図 (1/300) (註 アルファベットは構造面図作成位置を示す。)



第6図 グリッド配置図 (1/300)



第7図 調査区東北縦断面図(1/80)

配置され、住居址相互が切り合う状況を示すものは数例に止まる。掘立柱建物址は住居址群と接近した時期のものは切り合う関係が認められるが、平安時代後半のそれは単独に近く、柱穴そのものも小振りとなっている。土坑群は住居址群の周辺部に配置され、住居址を切り込んでいるものは不確定な1例を上げるに止まる。奈良時代前半代の溝は、調査区長軸方向に走る2条と第2次調査区からの延長である調査区南西地区で検出した鍛形に折れている溝の他は、出土遺物が少なく時期を特定するのが困難な溝が南地区に集中している。歓溝との切り合が見られるのはごく限られた地区ではあるが、歓溝よりは先行しているものもあるようだ。

歓溝は幅30~40cm、深さ5~10cmの規模で調査区全体に展開しているが、ほぼ東西方向に構えられ一定の地区割りが施されていたと推定できる。また、地区割りの境界付近では地山面の傾斜が微妙に変換しているのが認められ、切り合う歓溝や重複する歓溝が見られる地区も分離してとらえることが出来る。歓溝の覆土からの遺物は極めて少なく、さらには出土遺物は古代の須恵器、土師器の細片となるものであり、所産時期を特定することは困難である。灌漑用水が整備されて水田地帯になる以前の時期であろうか。

IV 遺構

1 積穴式住居址

(1) 第1号住居址（第8図、図版7）

調査区の北西端部で検出した住居址と推定した落ち込みであるが、やや不確定な部分を残している。南方向7.5mで第4号住居址、南東方向約14mで第5A号住居址が配置されている。平面形は円形を呈し、径約10mの積穴式住居跡で、壁の立上がりは比較的強いが、壁溝は掘り込まれてはいなかった。覆土は黒褐色粘質土が卓越していて、床面や壁ぎわ近くで茶褐色粘質土が薄く堆積している。覆土からは河原石の出土はなかったが、床面の一部や床面から約10cm程下がった位置からは礫層がのぞいている。床面の踏み固めた部分は検出できず、また、床面での遺物、焼土痕などは検出されなかった。覆土からの出土遺物も少なかった。平面プランが円形であることや覆土および周辺から弥生時代後期の上器が出土していることなどから該期の住居址と推定したが、第1・2次調査で弥生時代住居址の検出例がないことなどから確定はできない。

(2) 第2号住居址（第8図、図版7）

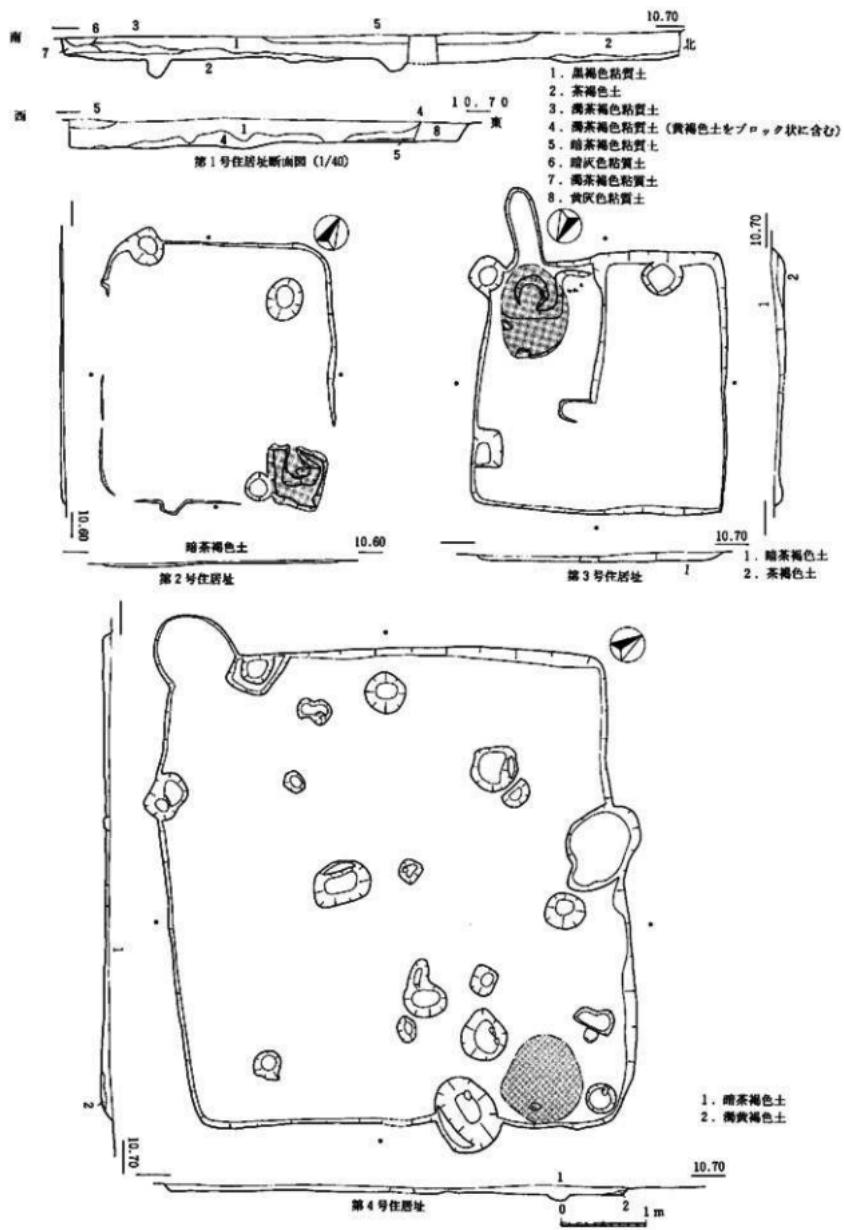
調査区の北西地区、285X215Yグリッドに位置し、住居址5棟が集中しているうちの1棟である。住居址相互の切り合い関係は認められなかった。南方向1.5mに第3号住居址、南西方向約6mに第7号住居址が位置している。平面プランは方形で、長軸をほぼ南北方向に置いている。長軸306cm、短軸272cmを測り、壁の立上がりがかろうじて窺える程度の暗茶褐色粘質土を呈する覆土を残すのみで、出土遺物は少ない。南東隅に平面コの字形のカマドが作り付けられていて、周囲は火熱を受けた痕跡が顕著であった。長さ、幅ともに86cm、高さ約5cmを測り、床面のレベルよりも高い位置にカマドの床面がきている。柱穴は見られず、床面で踏み締められたような状況は見られなかった。

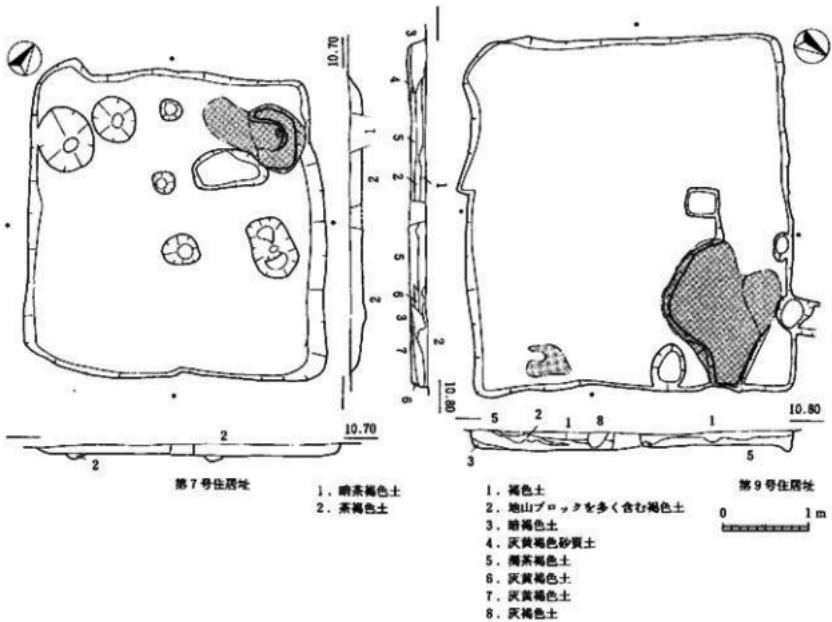
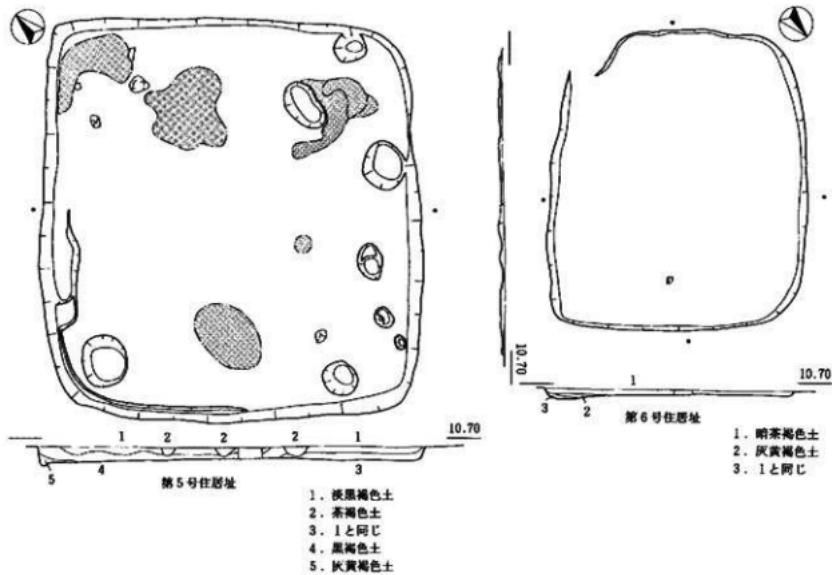
(3) 第3号住居址（第8図、図版7）

調査区の北西地区、280X215Yグリッドに位置している住居址で、東方向約1mに第4号住居址、南西方向約4mに第7号住居址が配置されている。平面プランは方形で、長軸をほぼ南北方向に置くのは先の第2号住居址と同じである。長軸308cm、短軸292cm、覆土の厚さ約5cmを測る。覆土からの出土遺物は少なく、床面ではカマド近くで破片を僅かに認める程度であった。第2号住居址と同じ様に南東隅には平面円形を呈するカマドが作られている。長さ62cm、幅60cmで、住居址側に広く焼土が拡がっている。カマドの外側には煙道と推定される落ち込みが、幅30cm、長さ90cmの溝となって伸びている。柱穴、床面の踏み締めなどは見られなかった。平面図で図示した中央の段差は、掘り過ぎによるもので、お詫びしておきたい。

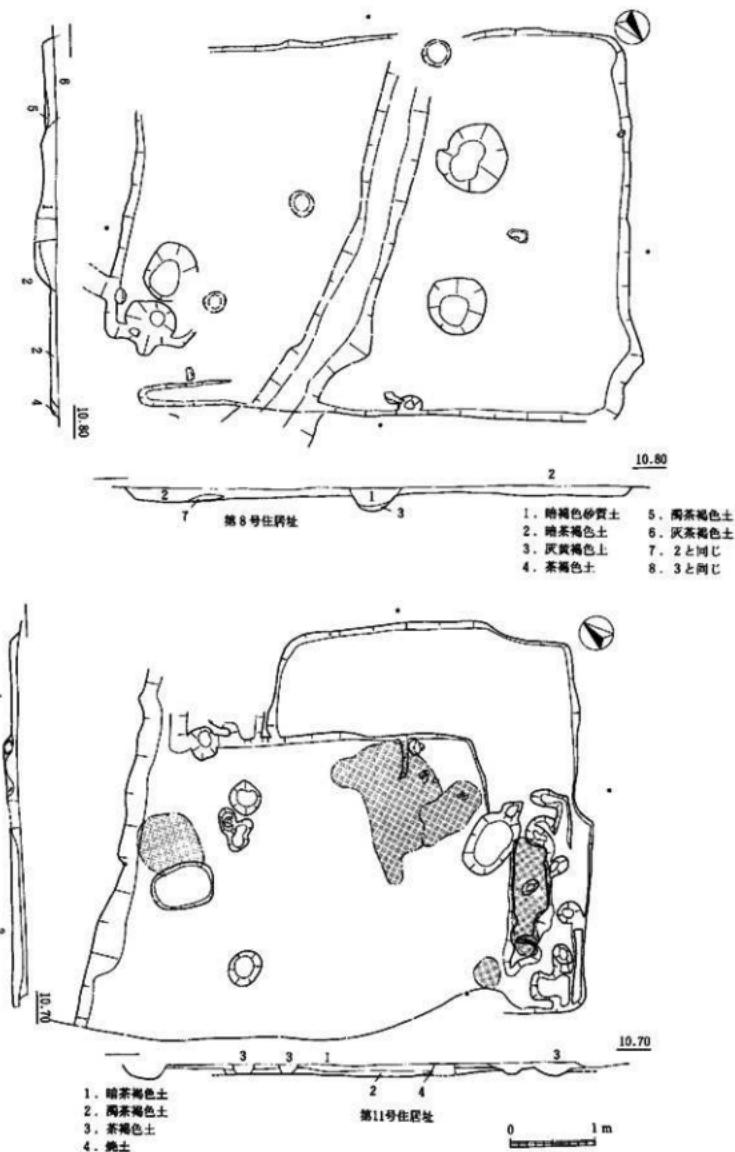
(4) 第4号住居址（第8図、図版7）

調査区の北西地区、280X225Yグリッドを中心として検出した大型の住居址である。第1・2号掘立柱建物と切り合い関係を持つもので、東方向約10.5mに第5A号住居址が位置している。平面プランは方形で、長軸方向は第2・3号住居址とはややずれを持って掘り込まれている。東西方向の長軸は566cm、南北方向の短軸は545cm、暗茶褐色を呈する覆土の厚さは約8cmを測る。覆土からの出土遺物は少なく、細片となったもので占められ、図示に耐えるものは少数であった。壁溝は見られず、床面で幾つかのピットを検出したが、住居址に伴う柱穴などを特定することはできなかった。南東隅に径約100cmの焼上痕を認めた。カマドが作られていたかは不明である。





第9図 第5～7・9号住居址 (1/60)



第10圖 第8・11号住居址 (1/60)

(5) 第5A・5B号住居址（第9図、図版8）

調査区の北地区に位置する住居址で、280X240Yグリッドを中心にして検出された。東方向には第5B号住居址が切り合い、南方約60cmには第6号住居址が位置しており、第2・3号住居址群とは別のグループをなしているものと考えられる。平面プランは方形で、長軸方向を南北方向に置いているのは第4号住居址と同じである。南北方向の長軸は480cm、東西方向の短軸は450cm、深さ約18cmを測り、本調査では最も遺存状態の良好な竪穴式住居址であった。覆土は黒褐色土が卓越しているのは、他の住居址には見られないもので、ある程度の深さを持った竪穴であった為なのである。土層断面図の黒褐色土を切り込んでいた茶褐色土は、後世の敵溝の覆土である。壁溝は西側の狭い範囲に掘り込まれているのが認められたが、全体的に巡らされたかは不明である。床面には5カ所に及ぶ燒土痕が見られたが、カマドは作られなかったようだ。なお、北隅の燒土の周辺には、大きな礫を検出しているが、関連を持つものであろう。柱穴は不明である。覆土からの遺物は小片になったもので占められているために、図示できたものは少ない。

第5B号住居址は、第5A号住居址の北側に位置しているもので、覆土は暗茶褐色土數cmを持つだけのものであった。長軸は第5A号住居址と同じく南北方向に置くものであるか、規模は不明である。東西方向の短軸は260cmであるから、長軸は300cmを越えないものと推定できる。覆土からの遺物は、皆無であった。

(6) 第6号住居址（第9図）

調査区の北部、275X240Yグリッドに位置している住居址で、東約1.5mで南北方向に走る第2B溝にとどく。平面プランは方形で、南北方向の長軸は356cm、東西方向の短軸は300cm、深さ數cmを測る。覆土は暗茶褐色土一層という状態で、遺物の出土も少なく、弥生土器を図示したに止まる。床面には柱穴、焼土は認められなかつた。

(7) 第7号住居址（第9図、図版8）

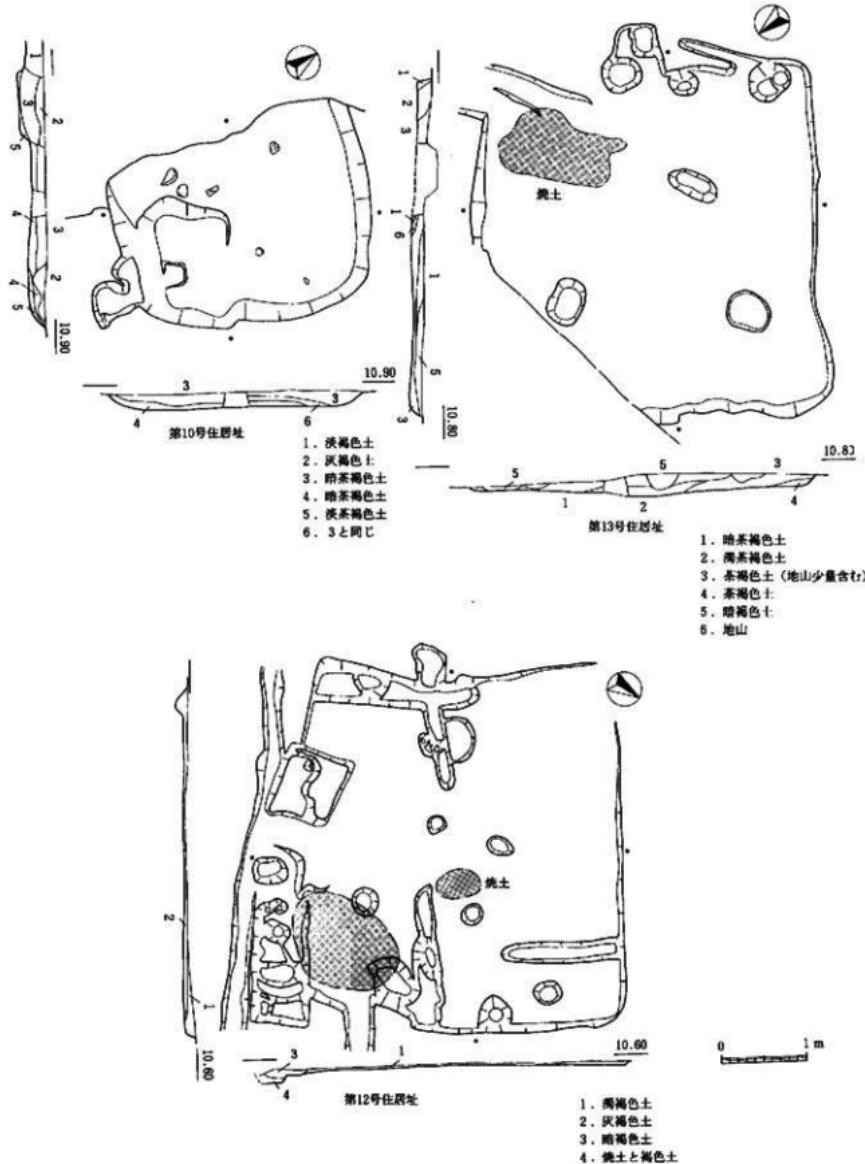
調査区の北部、275X210Yグリッドで検出した住居址で、第2・3号住居址群のグループに含まれるものである。北東方向4mに第3号住居址が、北方向約3mで第2次調査区の住居址が、南方向約9mに第9号住居址が配置されている。平面プランは方形で、北西方向に長軸を置き364cm、短軸350cm、深さ約12cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、遺物の出土はごく少量で、図示できるものは得られなかった。床面は凸凹が目立つが、地山が黄褐色砂質土であるために水に溶け易く、変形してしまった為である。北隅のコーナーからややずれた位置に、カマドが作られている。長さ60cm、幅80cmを測り、焼土の範囲は内側に広がっている。床面の柱穴群は一部を除いて後世に掘られたもので、住居址に関わるものではないようだ。

(8) 第8号住居址（第10図、図版8）

調査区の南西部、260X205Yグリッドを中心にして検出した住居址で、平安時代後期の第5号据立柱建物跡が複合している。北方向2.5mには第9号住居址が、南方向約5mには第11号住居址が位置している。平面プランは長方形で、北西方向に長軸を置いている。長軸の距離は600cm、短軸は445cm、深さ約10cmを測る。住居址の中央部に第6号溝が走り、第5号据立柱建物の柱穴が切り込んでいることなどから、全体形がつかみにくくなっている。これまでの住居址と大きく異なるのは、床面の地山が黄褐色砂質土ではなく、茶褐色砂質土で砂粒がやや大きくなっていることである。床面ではカマド、焼土などは検出できなかった。床面に径70~80cm、深さ50cmを越える3個のビットを検出したが、住居址のものか、他の据立柱建物になるのかの判断は下せなかった。暗茶褐色の覆土からは、土師器壺の比較的大きな破片が出土している。

(9) 第9号住居址（第9図、図版9）

調査区の中央部、265X215Yグリッドで検出した住居址で、遺構検出面は周辺に比較して低くなっている座地



第11图 第10·12·13号住居址 (1/60)

状の地形の中にあった。北方向約9mで第7号住居址が、南方向約13mで第10号住居址、同じく約9mで第11号住居址が配置されている。平面プランは方形を呈し、北東方向に長軸を置いている。長軸412cm、短軸380cm、深さ約20cmを測り、比較的保存状態の良い住居址であった。覆土は暗褐色土、濁茶褐色土が卓越し、間層に地山ブロックを含んだ褐色土が見られることから、微地形的に窪地状になっていることもある。時間を持ってかけて堆積したものではないことが推定される。壁はほぼ直角に近く立ち上がるが、壁溝は掘り込まれてはいない。床面の一部に踏み締められて堅くなっている部分が認められたが、柱穴の痕跡はとらえられなかった。北隅では床面から5cm程度浮いたレベルで、焼上面が検出されたがカマドを施設してあったかは不明である。遺存状態は良好であったが、覆土からの出土遺物はきわめて少なかった。

00 第10号住居址（第11図、図版9）

発掘区の南東部、250X220Yグリッドで検出した住居址で、2B溝によって西側半分を失っている。東方向約60cmで第2C溝が、西方向約5mに第11号住居址が位置している。平面プランは隅円方形を呈し、東西方向に長軸を置くものであろうか。南北方向で約300cm、東西方向の現況では260cm、深さ約20cmを測る。暗茶褐色を呈する粒子の細かい砂質土が覆土で、図示に耐える遺物の出土が住居址の中で最も多かった。壁はゆるやかに立ち上がるもので、断面形が皿状を呈している。床面はやや踏み締められた状況を示し、河原石が散在している。床面では炭化物の散布は見られたが、焼土粒は検出できなかった。欠損している部分にカマドが位置していたのだろうか。

01 第11A・B住居址（第10図、図版10）

発掘区の南西部、250X210Yグリッドで検出した住居址で、2棟が切り合っているものと推定される。南側は河道跡の検出のために掘削を行ってしまったもので、第13号住居址の在り方とともにお詫びしておきたい。南北向約1.5mに第12号住居址、西方向約1mに第13号住居址が配置されている。先行する東側のB号住居址は、東西方向に長軸を置く平面長方形プランを呈するものと推定され、長軸443cm、短軸372cm、深さ8cmを測る。南西隅に焼土面が広がっているが、新たに掘り込まれた住居址や歓溝によって細長い焼上面となって残っている。覆土からの出土遺物は少ない。

A号住居址はやはり歓溝によって搅乱されているために規模が判然とはしないが、焼土面の分布状況から東西方向に長軸を置く平面長方形プランを呈するものと推定される。長軸約430cm、短軸は現況で360cm、深さ約15cmを測る。焼土面は3カ所に分散して認められた。床面は比較的踏み締められた状況を示していた。床面には完形を保っていた須恵器短頸壺が見られた他、他の住居址より多くの遺物が得られた。

02 第12号住居址（第11図、図版9）

発掘区の南西部、245X210Yグリッドを中心として検出した住居址で、歓溝による搅乱を受け西側の掘込み面が判然しない。西方向には間隔を置かず第13号住居址の北隅が位置しており、切り合っていた可能性が考えられる。平面プランは長方形を呈し、東西方向に長軸を置くのは第11B号住居址と同じであり、同時に存在していた可能性が考えられる。長軸420cm、短軸約390cm、深さ5cmを測る。焼土面は中央部と東南隅に見られるが、カマドが施設されていたかは不明である。濁褐色砂質土の覆土からの出土遺物は少ない。

03 第13号住居址（第11図、図版10）

発掘区の南西部、245X205Yグリッドを中心に検出した住居址で、河道跡の上に位置しているもので、北隅を欠損してしまった。また、東側には歓溝があり込んでいるために掘込み面が判然とはとらえられなかった。平面プランは方形プランをとるもので、長軸、短軸ともに約410cmを測る。床面は茶褐色を呈する砂質土であるが、他の住居址の床面の砂粒より粗くなっている。焼土面は南東部に広がっているが、カマドが施設されていたかは

不明である。床面は北方向にやや傾斜を持っていて、幾つかのピットが見られたが柱穴と特定は出来ない。

2 挖立柱建物

(1) 第1・2号掘立柱建物跡（第12図、図版7）

調査区の北西部、 285×220 Yグリッドを中心として検出した掘立柱建物跡で、第4号住居址と複合している。また、1・2号掘立柱建物跡は住居址と複合する地点で重複していることが、南西隅の柱穴の切り合い関係で窺え、第2号掘立柱建物跡が先行していると判断された。桁行方向を南北方向に置き、磁北から21度西にふれてい。る。桁行3間、梁行2・3間の建物で、梁行の間が異なっているのが特徴である。桁行を西側の辺で見ると、北から $200\text{cm} \times 200\text{cm} \times 230\text{cm}$ （合計630cm）を測るが、東側の辺では北から $230\text{cm} \times 200\text{cm} \times 200\text{cm}$ （合計630cm）を測り、対照的な空間となっている。北辺の梁行は2間で $240\text{cm} \times 250\text{cm}$ （合計490cm）、南辺の梁行は3間で $150\text{cm} \times 150\text{cm} \times 170\text{cm}$ （合計470cm）を測る。柱穴の掘り方は平面長方形プランを呈し、掘り方の北端に柱根を寄せた二段掘りとなっている。長軸80cm前後、短軸50cm前後、深さ30~40cmを測る。柱穴の覆土からは、小片となった上器が得られている程度である。

第2号掘立柱建物は第4号住居址の大部分と複合し、第1号掘立柱建物に南接しているもので、柱穴の掘り方が椭円形や方形プランなどのばらつきが見られる。桁行3間、梁行2間の建物で、梁行の北側辺では柱穴を発見できなかった。桁行の西側の辺で柱間は北から $210\text{cm} \times 200\text{cm} \times 200\text{cm}$ （合計610cm）を測り、梁行は $220\text{cm} \times 230\text{cm}$ （合計450cm）を測る。柱穴の掘り方は方形、椭円形、長方形プランがあり、径50~70cm、深さ20~40cmを測る。第1号と同時に建てられていたとは考えにくいが、桁行方向が同じであり梁行の一辺が接していることから第1号掘立柱建物を北側部分に拡張した可能性は考えられる。今後の類似例の集積を待って再検討しなければならないと言える。

(2) 第3号掘立柱建物跡（第13図、図版11）

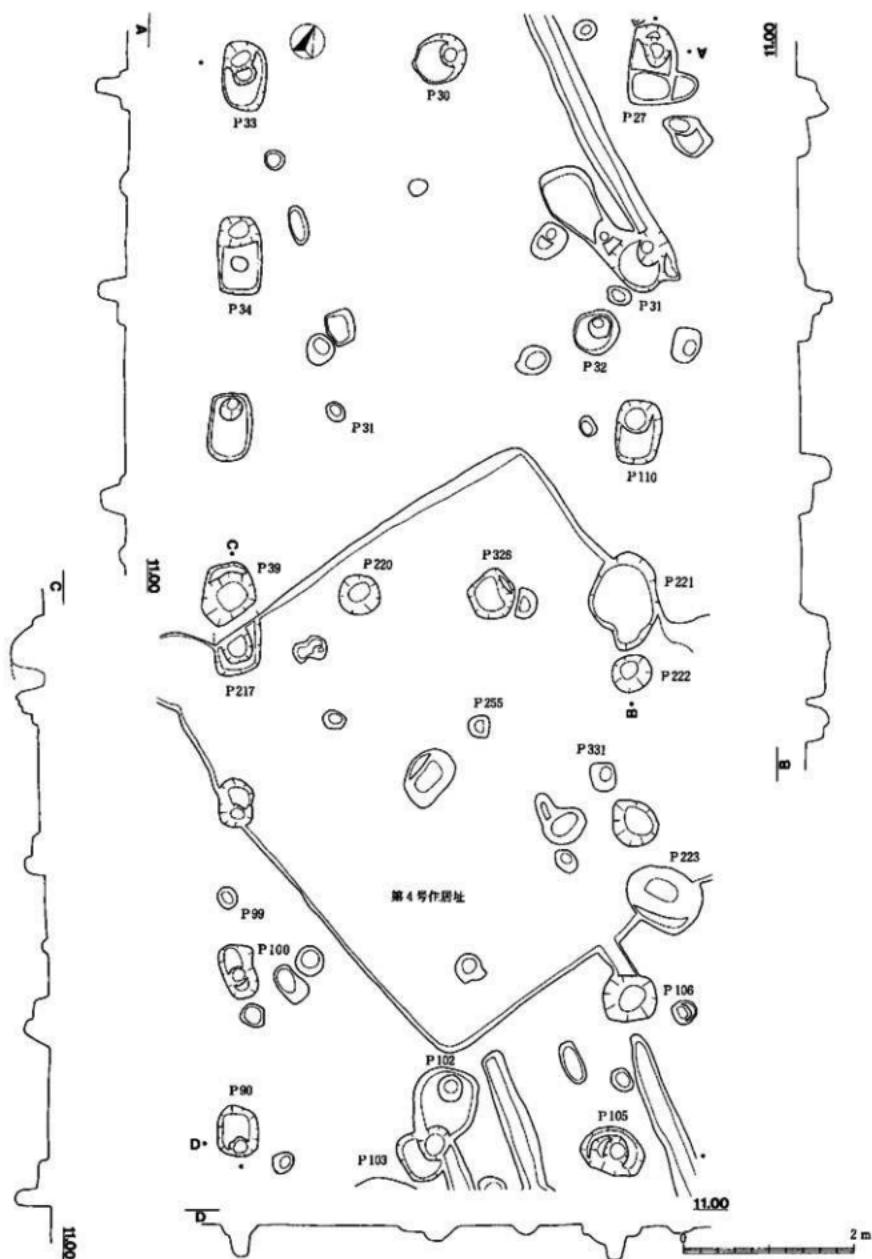
調査区の南西部、北安田北遺跡を縦断して流れている大溝4B溝の肩部に接している総柱の掘立柱建物である。 265×200 Yグリッドを中心として検出されたもので、東方向約12mに第4号掘立柱建物が、東西棟である第5号掘立柱建物跡が東側に隣接して配置されている。主軸は北41度西に置いていて、桁行、梁行ともに2間の倉庫跡と推定される。桁行の柱間は $140\text{cm} \times 140\text{cm}$ （計280cm）、梁行の柱間も同じ距離を測る。柱穴の掘り方は平面椭円形プランを呈し、径50~100cm、深さ40~50cmを測る。南西隅の柱穴には長さ20cm前後の河原石2個が含まれていた。

(3) 第4号掘立柱建物跡（第13図、図版11）

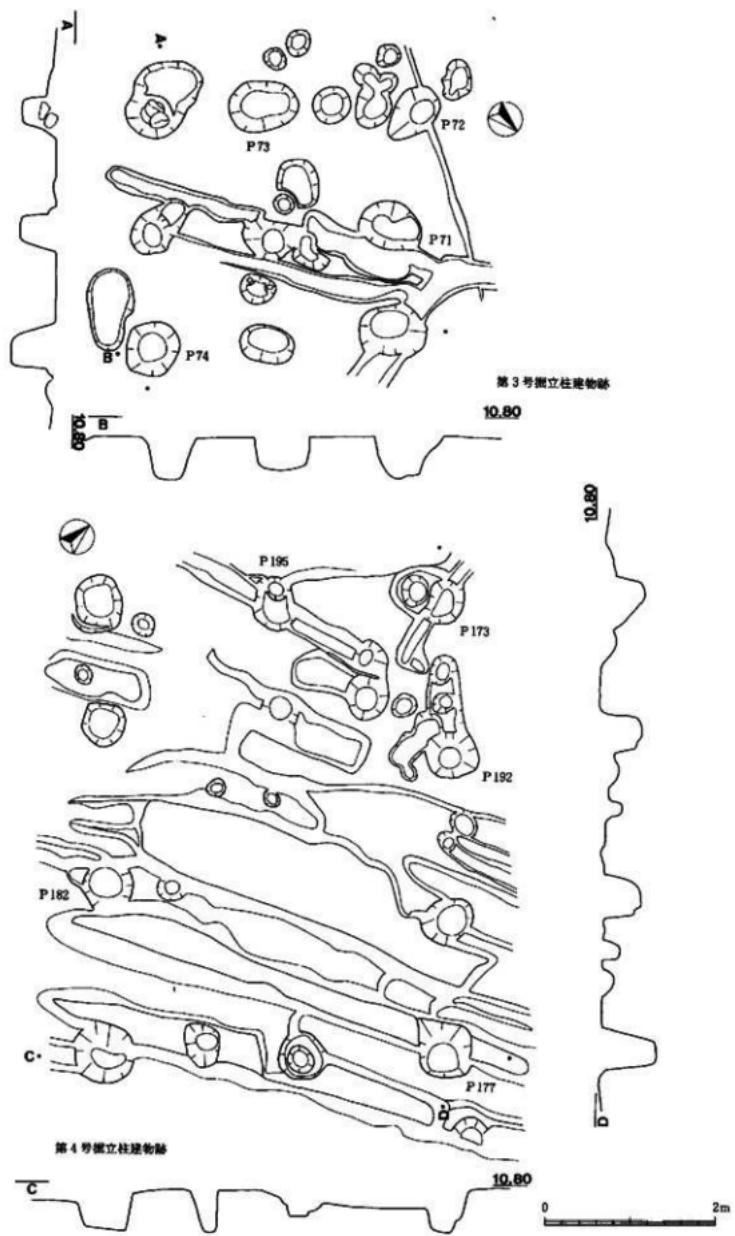
調査区の中央部、 255×215 Yグリッドを中心として検出した掘立柱建物で、東方向約5mに第2B号溝が、南北方向、西方向ともに竪穴式住居址が配置されている。柱穴群は畝溝に全く覆われていたために、畝溝を完掘した後でようやく掘立柱建物跡と理解できたものである。南北方向に桁行を置くもので、主軸は北42度西に振れてい。る。2間×3間の建物で、桁行の柱間の西側の辺で北から $150\text{cm} \times 180\text{cm} \times 210\text{cm}$ （合計540cm）、梁行の柱間は $170\text{cm} \times 230\text{cm}$ （合計400cm）を測る。柱穴の平面形は畝溝によって掘り方の上が擾乱されている為に正確にはとらえがたいが、方形ないしは椭円形を呈しているようだ。径50~70cm、深さ30~50cmを測る。柱穴群からの出土遺物は細片だけであった。

(4) 第5号掘立柱建物跡（第14図、図版11・12）

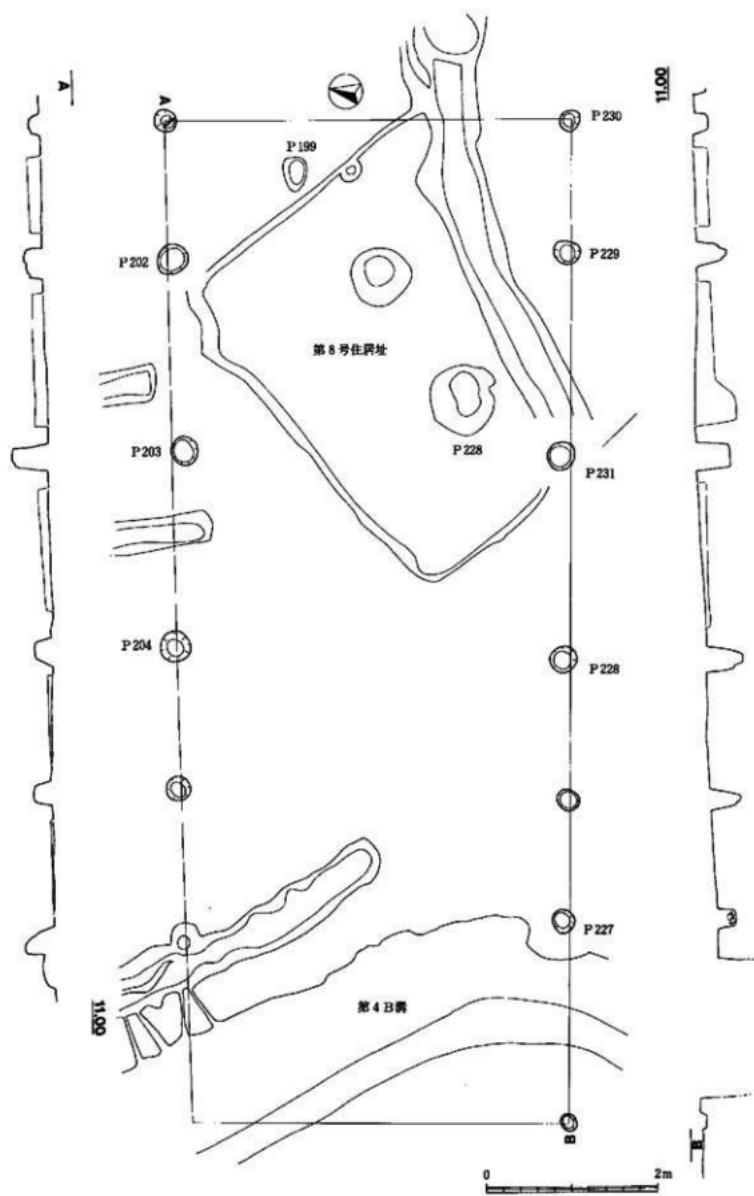
調査区の南西部、 260×205 Yグリッドを中心として検出した掘立柱建物で、第8号住居址、大溝第4B号溝の上に構築されている。第3号掘立柱建物は西側に接して位置し、東方向約2.5mには第4号掘立柱建物が配置さ



第12圖 第1・2号掘立柱遺物跡 (1/60)



第13図 第3・4号掘立柱建物跡 (1/60)



第14図 第5号掘立柱建物跡 (1/60)

れている。掘立柱建物の時期を各々特定するのは困難であるが、大溝の肩部に位置しているP227（柱穴）から一括の土師器が出土していることから、掘立柱建物の中では最も新しいものと確定することが出来た。遺構面は河道跡の上層の覆土である淡茶褐色の粒子の粗い砂質土で、柱穴の径は30cm前後、深さ15~45cmを測った。主軸を東西方向、北75度東に置いてくる。1間×6間の形で柱穴を確認したが、検出し得なかった地点があり柱間が増える可能性が考えられる。桁行の柱間は北側の辺で、165cm×225cm×230cm×170cm×180cm×(210cm)（合計1,280cm）、梁行は480cmを測る。

3 上坑

土坑は調査区の北西部、第3号住居址を中心とする地区にまとまっていて、幾つかの単独で位置する土坑が見られると言う状態となっている。これらの土坑の幾例かは樹根跡の可能性を持つものと考えている。

第1号土坑は調査区の北部、285X235Yグリッドで検出したもので、平面橢円形プランを呈している。第5A号住居址の西方向約5mに位置している。畠溝によって北側の掘り込み面が判然としない。南北方向、東西方向ともに約200cm、深さ25cmを測る。床面は比較的平坦に整えられている。本土坑からの出土遺物で図示できたものは無かった。

第2号土坑（第15図、図版13）は調査区の北西部、275X225Yグリッドに位置しているもので、第4号住居址、第3号土坑に隣接している。畠溝が中央を横断していて、土坑の床面より深く掘り込まれている。平面橢円形プランを呈し、南北方向の長軸は168cm、短軸は120cm、深さ8cmを測る、床面は平坦である。覆土の上層は炭化物を多く含んだ層で、下位は暗褐色粘質土であった。土師器の甕が上層から出土している。

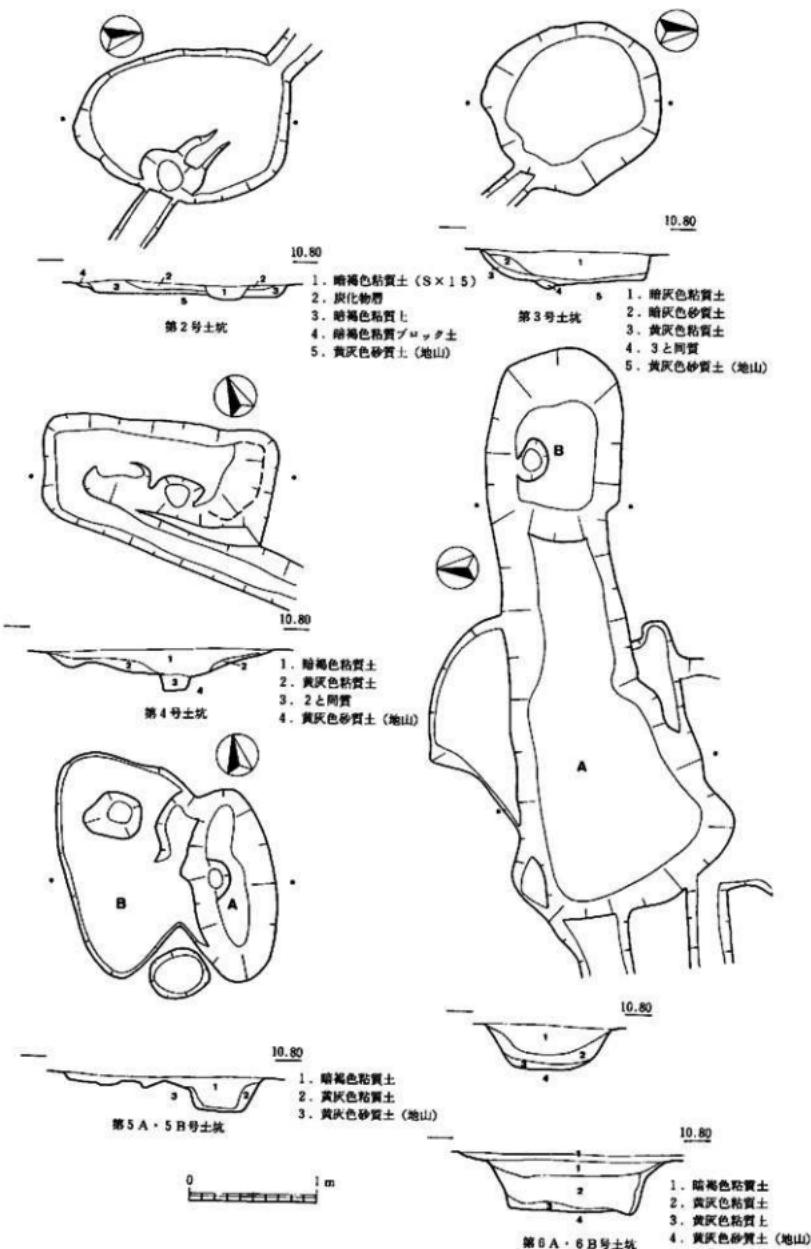
第3号土坑（第15図、図版13）は、第2号土坑と同じ275X225Yグリッドに位置しているもので、平面橢円形プランを呈している。南北方向の長軸は140cm、短軸125cm、深さ24cmを測る。覆土は暗灰色粘質土が大部分で、平坦な床面近くに地山と同じ色調の黄灰色粘質土が薄く堆積している。床面の一部に小ピットが見られる。出土遺物は見られなかった。

第4号土坑（第15図）は、第3号土坑の南80cmに位置しているもので、平面長方形プランを呈している。畠溝によって南側の掘り込み面が失われている為に、やや歪になっているが元は整った長方形プランを成していたものと推定される。東西方向の長軸は180cm、幅約90cm、深さ18cmを測る。床面は中央部に窪むような形で落ち込み、径30cmのピットが穿たれている。出土遺物で図示できたものはない。

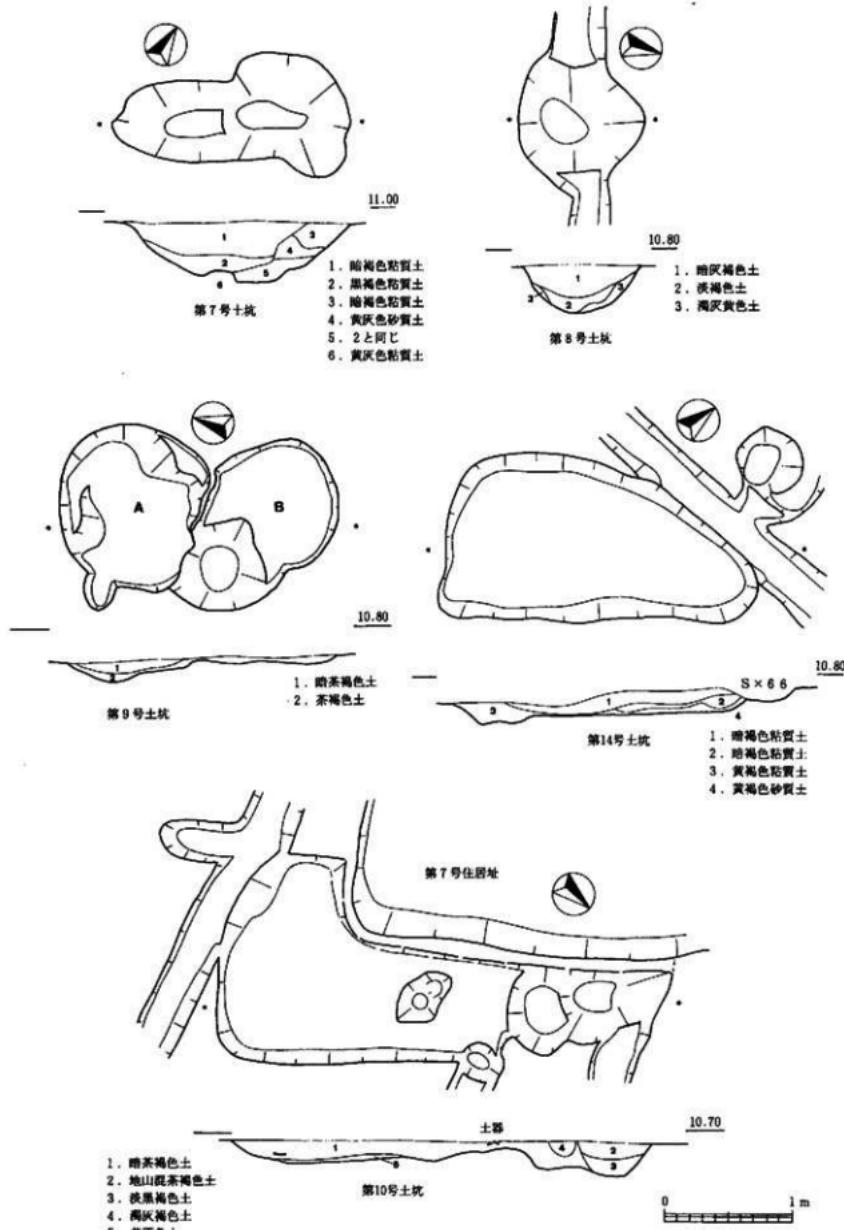
第5A・第5B号土坑（第15図、図版14）は、調査区の南西部、275X220Yグリッドで検出したもので、2基が南北方向に並列して位置している。ともに平面プランは長楕円形で、東にあるA号は長軸154cm、幅72cm、深さ28cmを測る。床面の中央にピットが見られる以外は平坦に整えられている。覆土は床面近くの黄灰色粘質土は薄く、B号土坑と同じ暗褐色粘質土で埋められている。B号土坑は長軸180cm、短軸は約120cm、深さ4cmを測る。床面は平坦ではなく凹凸が目立つ。

第6A・第6B号土坑（第15図、図版14）は、第5号に隣接して検出したものであるが、畠溝が交差しているためにつながった形となっているが、元は独立していたものであろう。A号は平面長楕円形を呈し、長軸262cm、短軸158cm、深さ45cmを測る。畠溝と並行している部分で深く穿たれていて、覆土の大部分である黒褐色土から多数の遺物が出土している。B号土坑は約60cm東に離れた位置に掘り込まれていて、平面橢円形をなしている。長径153cm、短径106cm、深さ34cmを測る、床面は平坦であるが、ピットが検出されている。覆土はレンズ状に堆積していて、床面近くは地山の色調に近いものであった。

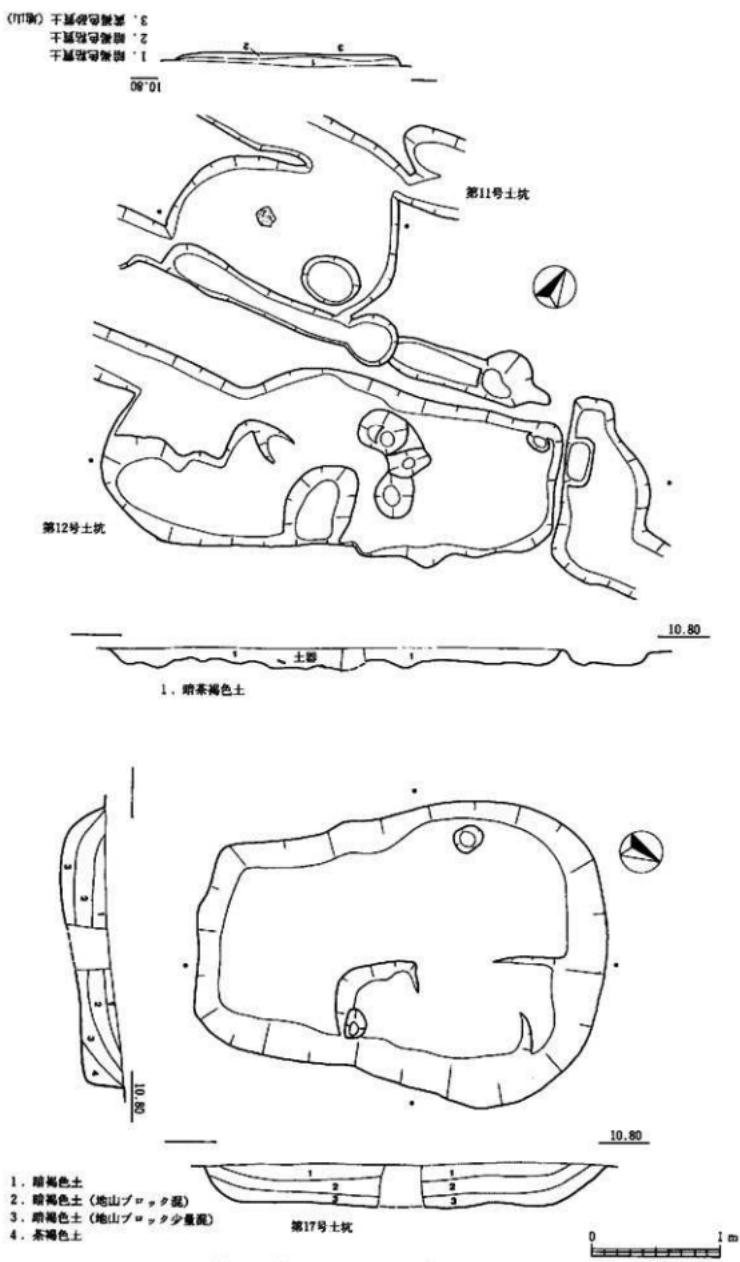
第7号土坑（第16図）は、調査区の南西部、270X225Yグリッドで検出したもので、第4号土坑に隣接している。平面橢円形の土坑が重複して掘り込まれたものと推定される。西側に位置している新しい土坑は、平面長楕円形を呈し、長径146cm、短径64cm、深さ40cmを測る。床面には凹凸がみられる。古い方の土坑は長径約110cm、短径83cm、深さ48cmを測る。出土遺物で図示できたのは、土師器の鍋1点だけである。



第15圖 第2～6号土坑 (1/40)



第16图 第7~10·14号土坑 (1/40)



第11・12・17号土坑 (1/40)

第8号土坑（第16図）は、第6号土坑に隣接する275X215Yグリッドで検出したもので、中央を畠溝が横断している。平面プランは円形を呈し、98cm×約110cm、深さ38cmをはかる。覆土の上層断面に畠溝が現れていないことから、古代の所産であるかはやや疑問が残る。出土遺物は小片だけであった。

第9A・9B号土坑（第16図、図版14）は、発掘区の南西部、280X230Yグリッドで検出したもので、第3号住居址に隣接している。3基が複合しているものと推定される。A号土坑は平面椭円形を呈し、長径130cm、短径120cm、深さ16cmをはかる。床面は凹凸が目立つ。南に隣接するB号土坑はA号土坑に類似した形態をとっていて、長径約110cm、短径106cm、深さ4cmを測る。B号土坑の西には平面方形プランの径77×74cm、深さ35cmの土坑（ピット）が掘り込まれている。

第10号土坑（第16図、図版15）は、275X215Yグリッドで検出したもので、第7号住居址と複合している。比較的大型であることから住居址の可能性も考えられたが、西側の落ち込みを示すコーナー部分が検出されたことから土坑としてとらえた。ピット、畠溝および住居址で攪乱されているため全体の大きさは確定できないが、平面プランは略長方形を呈し、北西方向の長軸は約250cm、短軸は164cm、深さ18cmを測る。暗茶褐色粘質土の覆土には図示できる遺物が比較的多く含まれていた。

第11号土坑（第17図、図版13）は、270X210Yグリッド、第12号土坑と隣接して検出した。畠溝によって掘り方は一部不明となっている。平面プラン長椭円形を呈し、東西方向の長径は184cm、短径約110cm、深さ10cmを測る。東端はピット、中央には河原石が検出された。覆土からは図示に耐える遺物の出土は見られなかった。

第12号土坑（第17図）は、畠溝、ピットなどが複雑に入り込んでいるために、規模を確定することが困難な土坑である。覆土は暗茶褐色粘質土一層だけで、床面には凹凸が目立つ。平面プランは長椭円形を呈するものと推定し、東西方向の長軸は355cm、短軸140cm、深さ16cmを測る。床面近くから数点の遺物が出土している。

第13号土坑は270X205Yグリッド、第11号土坑の西側で検出した。畠溝によって掘り方上面は大きく変形を受けている。平面プランは円形で径約110cm、深さ9cmで、床面は平坦である。覆土からは須恵器長頸甌が出土している。

第14号土坑（第16図、図版15）は、270X210Yグリッドの第12号土坑の西に隣接する位置で検出した。畠溝によって北端のコーナーが不明瞭であるが、平面長椭円形を呈するものと推定できる。長径248cm、短径132cm、深さ18cmを測る。床面は南端部分で凹凸が見られる以外は平坦に整えられている。

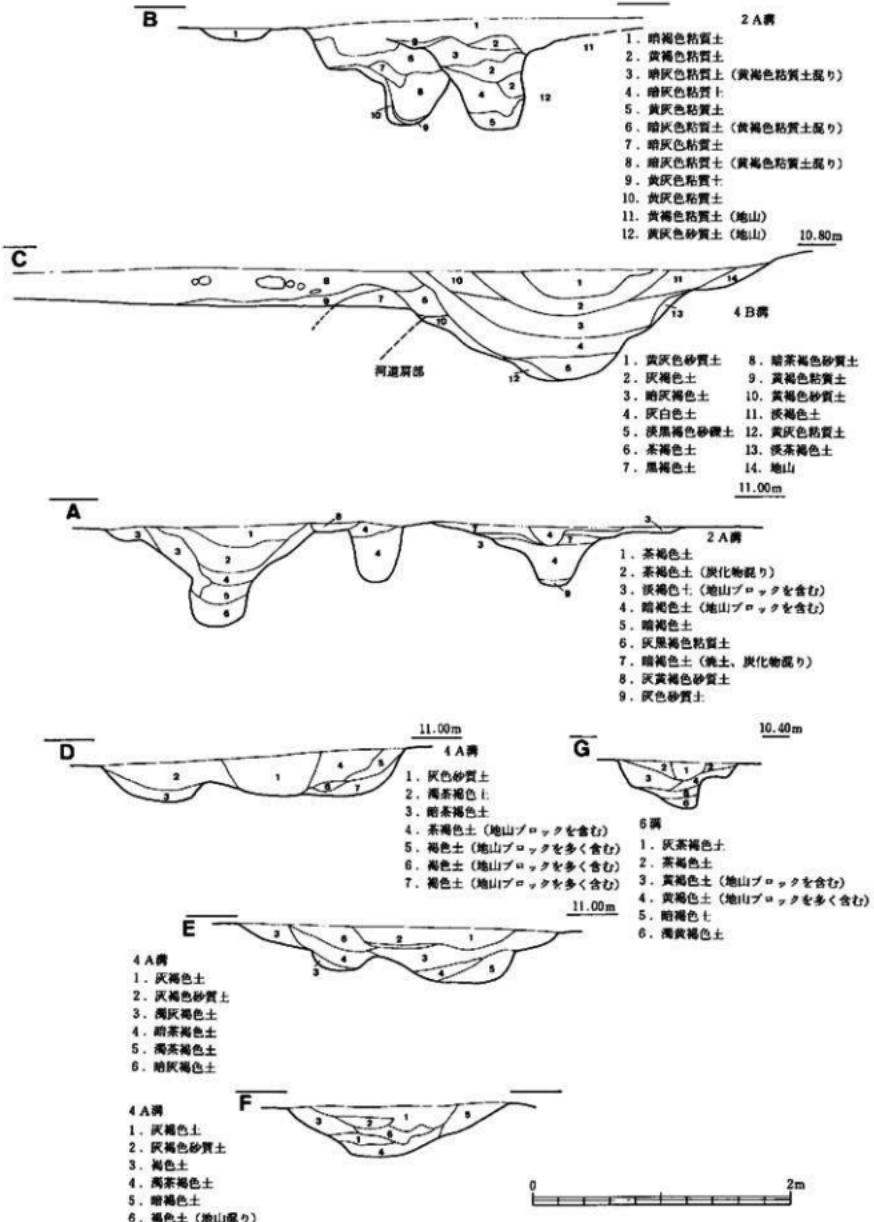
第15号土坑は275X205Yグリッドで検出したもので、第7号住居址の西約3.5mに位置している。南北方向に長い長椭円形を呈し、長径175cm、短径108cm、深さ5cm程度で、南側にピット状に落ち込んでいる。覆土は暗茶褐色粘質土である。

第16号土坑は260X220Yグリッドで検出したもので、第9号土坑の南方向約3mに位置している。小ピットや畠溝が複雑に切り込んでいることから、明確に土坑としてとらえるのは困難である。

第17号土坑（第17図、図版15）は、上記の土坑群から離れた位置にあり、第13号住居址に隣接している。検出グリッドは240X210Yで、縄文時代の河道路の覆土の中に掘り込まれたものである。検出した土坑群の中で最も規模の大きなもので、平面形は隅円方形プランを呈している。長軸をほぼ南北方向に置き、長さ322cm、幅242cm、深さ34cmを測る。覆土は暗褐色粘質土が地山ブロック土を交えて、レンズ状に堆積している。出土遺物は比較的多かったが、図示に耐えるものは少なかった。

4 溝

1A・1B溝は東西方向に流れるもので、235X225Yグリッドから240X195Yグリッドの範囲で検出した。A溝の幅は1.7m、深さは10~42cmの幅があり、東側が浅く西側が深い。交差している4A溝よりは新しく、畠溝よりも古い時期に想定できるが、出土遺物を見る限りにおいては大きな時期差はないようだ。1B溝は並行して流れているもので、覆土は同じ灰褐色の砂質土であった。幅は約190cm、深さ20~40cmでやはり東側が浅く、西側が



第18図 準断面図 (1/40) (アルファベットは連配置図に示した位置)

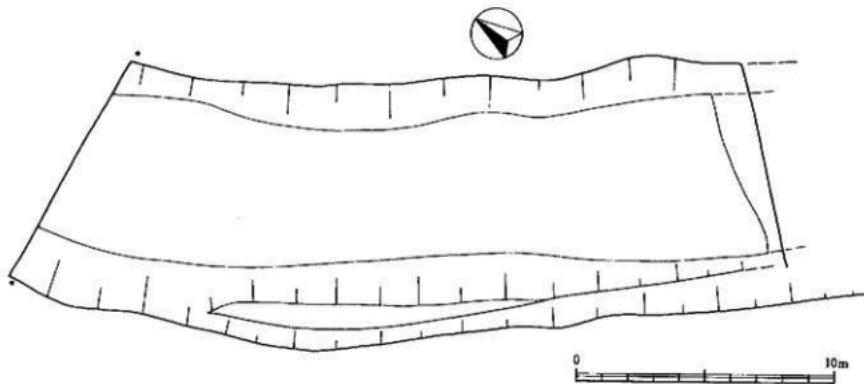
深くなっている。

2 A・2 B・2 C溝（第18図・図版16・17）は調査区の東側をほぼ南北方向に流れているもので、溝底の標高を見ると、2 A溝で北端が10.30m、南端が10.00mであり、北から南方向に流下していたものと考えられる。2 A溝の幅は120～215cmで、南方に向かって幅を広げているが、第18図に土層断面図で示したように改削が施されていて溝幅は150cm前後で納まるようだ。深さは40～90cmまでの幅があり、南方向に深くなっている。覆土はおおむね地山質に近い土質の灰褐色粘質土で、砂粒の細かくなつたもので、比較的早く堆積したものと推定される。覆土からの遺物は比較的少なかった。2 B溝は2 A溝の西側に2 m程度の間隔を置いて並行して掘り込まれているもので、幅70～90cm、深さ30cmを測る。溝底の標高で見ると、南端が10.39m、北端が10.30mを測り、平均10.40mで大きな落差が見られず、流下方向の確定は困難である。2 C溝は245X220Yグリッド付近で2 A溝から分離して掘り込まれている。幅1m、深さ約40cmを測る。溝内に須恵器甕口縁部一括が検出されている。

4 A・4 B溝（第18図・図版17）は調査区の南側で検出したもので、前者は南側から鏡形に折れて北西方向に流れ、さらに約20mの位置で北東方向に鏡形に折れ、溝幅を140cmから200cmに広げ、やはり約20mの位置で流路を北方向に変えて流れしていくもので、第2次調査区を斜めに縦断している。検出面からの深さは、南端で65cm（標高10.0m）、北端では100cm（標高9.65m）となっている。流路が鏡形に屈折しているのは、2 A溝においても認められるもので、なんらかの関係を推定することができる。上層断面で見ると、覆土はゆるやかなレンズ状堆積を示し、黒褐色土が顕著であることから、急激に埋没した溝ではないようだ。覆土からの出土遺物は比較的小ない。

5 河道跡

河道跡は第2次調査区からの延長で推定した4 B溝を掘り進めていく中で検出したもので、当初は溝幅が大きく挿入する程度と考えたために、住居址群の一部を破壊してしまった。川幅は約10m、深さ160cmである。検出した南肩部には縄文時代晩期と考えられる深鉢2個体が肩部の傾斜に沿うようにして検出された。河道跡の上層部分は古代の遺構面で、砂質土、粘質土となっているが、その下層には70cmの厚さで明褐色粘質土が厚く堆積していた。最下層には60cmの厚さで淡灰色砂質土が堆積していた。河道跡の地山面は褐色砂礫層が堆積していたが、礫と礫の間に若干の弥生土器が出土して、縄文時代から弥生時代後期までは同じ状態を保っていたものと推定される。弥生時代後期以降は土砂の堆積が急激に進行したもので、当時の気候や周辺の開発との関係を考える上で、ひとつの手掛かりとしてとらえることができる。



第19図 河道跡平面図 (1/200)

1. 黒褐色粘質土
2. 淡緑灰褐色砂質土
3. 明褐色粘質土
4. 黒灰色強粘質土
5. 黒灰色砂質土
6. 暗灰色強粘質土
7. 暗灰色強粘質土 (炭化物を含む)
8. 灰灰色シルト
9. 茶褐色砂質土

第20図 河道跡断面図 (1/80)

0 2m

V 出土遺物

1 遺構出土遺物（第21～27図）

住居址 第1号住居址の覆土からは、1・2の2点が図示できた。住居址の推定年代とは異なるものであった。1は口径23.8cmに復元されるもので、口縁がゆるく外反して立ち上がり、端部で段を形成する。口縁部の内外面とも丁寧に施され、外周のカキ目調整は薄くなっているが、内面のカキ目ははっきりと遺存している。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒が多く含まれている。焼成は良好である。

第3号住居址からは3・4が出土している。3は口径13.1cm、器高3.3cmを測る。底部の厚さが1cmと厚手のもので、口縁部の途中で内面がやや屈曲した成型となっている。4は、弥生時代の壺口縁部で、胎土に多量の砂粒を含んでいて、器表面は磨滅して荒れている。

第4号住居址の覆土からは5・6が出土している。5の弥生土器は内外面ともに赤彩が施された擬凹線の口縁部を持つ壺型土器に推定されるもので、胎土には砂粒が若干含まれている。6は瓶の底部に推定した小片で、底面には凹凸が見られる。黄灰色を呈し、胎土は精選されていて須恵器の胎土に類似している。小片の為に図示しなかったが、羽口の断片が見られる。

第5号住居址からは7が出土している。小甕に推定されるもので、小片のために口径は確定できない。体部に縱方向の粗い刷毛調整が施され、外反する口縁部は横ナデが成されている。

第6号住居址からは8が出土している。口径19cmに復元されるもので、遺存状態は良好である。口縁部は内外面共に横ナデが施されている。

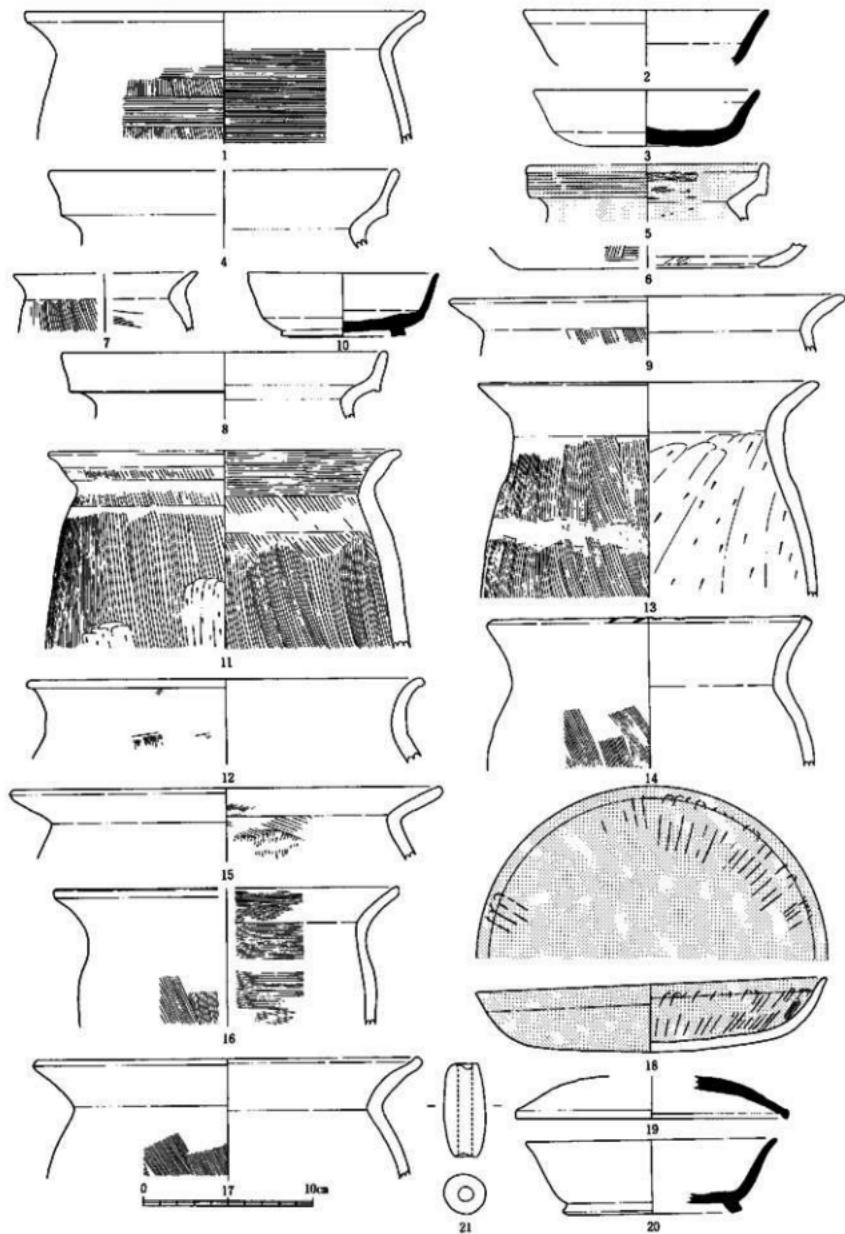
第7号住居址からは9が出土している。口縁が強く外反して立ち上がるもので、内面側の横ナデがより丁寧になされている。

第8号住居址からは11～13の出土があった。11は口径20.7cmを測るもので、内外面ともにカキ目調整が全面に施されている。外周の一部には縱方向にケズリがなされているのが見られる。外周の一部に煤の付着が見られる。色調は外面黄褐色を、内面明橙色をなしている。焼成は良好である。13は口径19.6cmに復元されるもので、体部内面に斜め方向のケズリが施されている。口縁部には若干の煤の付着がみとめられる。

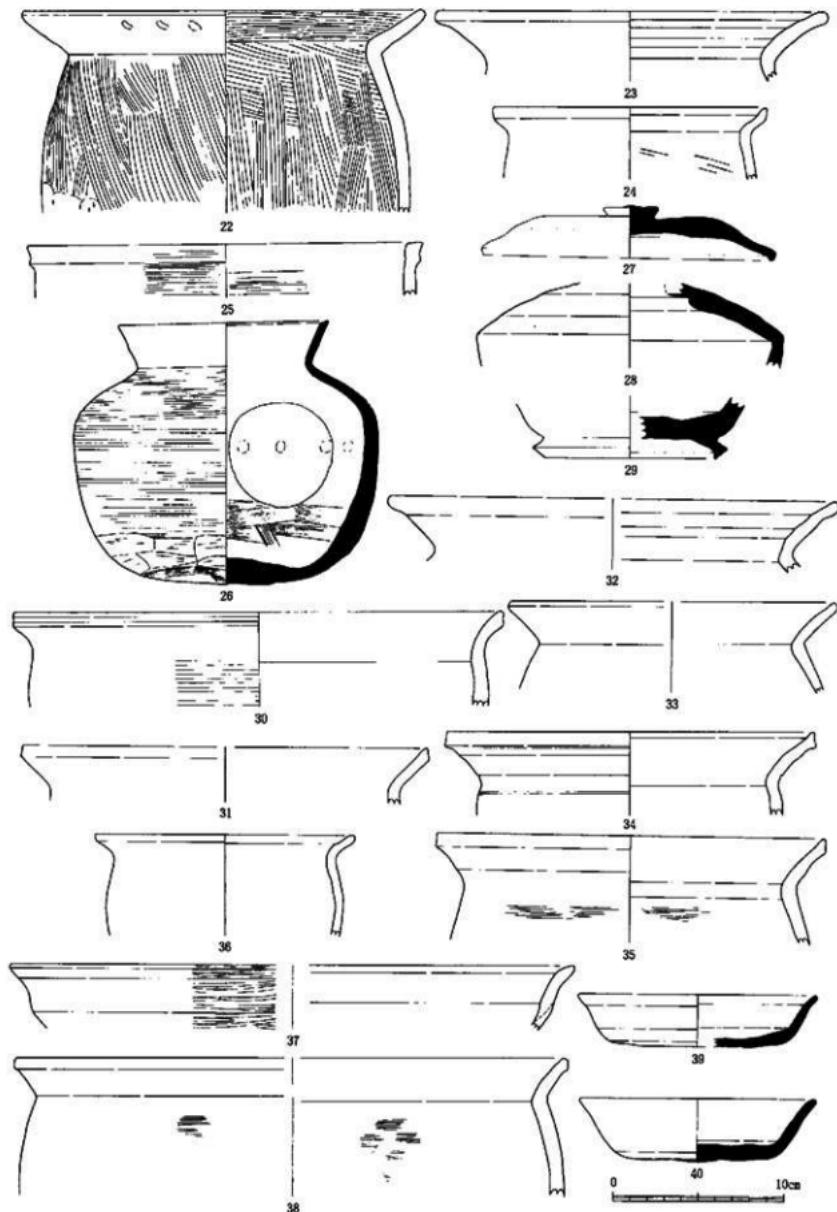
第9号住居址からは10が出土している。口径11.2cm、器高3.8cm、底径6.3cmを測るもので、口縁部の一部を欠損しているだけである。高台は粗略な形でつけられ、底部は比較的厚手であるが、口縁部は薄く口唇が尖り気味に成型されている。胎土に砂粒は含まれていないが、全体にザラついている。図示しなかったが、羽口の断片が出土している。

第10号住居址からは14～21までの出土があった。14は口径18.1cmに復元されるもので、ゆるく外反する口縁部の端部には面取が施され、斜め位置に刻みが2ヶ所見られるが、傷の可能性も考えられる。18は復元完形となつたもので、全体に赤彩が施されている。口径20.3cm、器高4.5cmを測る。内面には胎文の痕跡が薄く遺存している。胎土は明茶褐色を呈し、胎土は砂粒が見えないほどに精選されている。19は口径15.8cmに復元できるもので、灰色を呈し、胎土に殆ど砂粒が見えない。天井部には中程までケズリが施され、見た目より重量が軽く感じられる。20は口径14.6cm、器高4.45cmを測るもので、高台は外へ強く踏ん張る形で比較的大きなものがつけられている。胎土には微砂粒が多く含まれ、器表面はザラついている。21は完形の土鏡で、長さ5.6cm、径2.5cm、重量34.0gを計測する。

第11号住居址からは22～29までの遺物が出土した。22は口径23.5cmに復元されるもので、口縁部の外周を除いてカキ目調整が全体に施されている。23は口縁部が強く外反するもので、内外面とも横ナデ調整がいれられている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒は目立たない。25は第17号土坑出土のものと類似した点がみられ、同



第21図 住居址出土遺物(1) (1/3)



第22图 住居址出土遺物(2) (1/3)

一個体の可能性がある瓶の口縁部である。口唇部が若干肥厚し、突帯を巡らせており、灰黄色を呈した土師質土器で、胎土に僅かに砂粒が混和されている。26は口縁部を欠損しているだけでの完形上器で、口径12.4cm、器高15.5cm、胴部最大径18cmを計測する。口縁の端部を擒んで外に引き出す成型を行っている。体部の上端に二条の沈線を巡らし、底部近くのケズリ調整部分を除いて、全体に横方向のカキ目調整を軽く施している。底部は丸底で、体部とは別個に作成したものと推定され、ひび割れが焼成の段階で生じている。体部内部の丸印はヘラ先によって付けられたもので、ヘラ記号の一種かと推定される。27は口径17cm、器高3.2cmを測るもので、肩の張った天井部は平坦に成型され、口縁部近くまでケズリ調整がなされている。28は長頸瓶の肩部片で、肩部に薄緑色の自然釉が掛かっている。体部の上端部は丸く成型され、11縁部がその上に被さる形で接合しているのが観察される。29は瓶、臺頸の底部片である。

第12号住居址からは30・31の2点が図示できたが、ともに砂粒を多く含んだもので器表面が荒れていて、調整は不明である。32・33は第13号住居址からのものである。

土坑 34・35は第2号土坑から出土したもので、ともに器表面が荒れていて調整は不明である。口径は21.6cm、22.8cmを測り、口縁端部に段を形成する。

36は第5号土坑からのもので、口径15.2cmを測る小甕である。強く外反する口縁の端部は丸く納め、全体を横ナデ調整で整えている。色調は明茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。

37～52は第6A号土坑からの出土品である。37は外周を丁寧に磨き調整が施されている弥生土器で、口縁端部が肥厚して面を取る高杯に推定されるものである。39・40は口径13.8cm前後であるが、器高は3.1cm、3.8cmと大きく異なる。前者は微砂粒を多く含んで硬質であるが、後者は微砂粒は目立たず、灰黄色を呈して軟質の焼成となっている。産地の違いが窺える資料である。43は口径28.5cmを測る鍋型土器で、口縁の外周と内面の一部を除いてカキ目調整が施されているが、口縁のカキ目の幅は1.8cmで、体部のもので見ると、約2cm程度の幅を持っていることが想定できる。色調は灰褐色を呈し、器表面には砂粒が目立たない成型となっていて、焼成も良好である。44は口縁部を大きく外反して立ち上がらせるもので、体部が頸部のようになっている。45は口径14.2cmを測る小甕で、体部をカキ目調整、横ナデによって整えている。器表面および口縁部の内面には炭化物が付着している。胎土に砂粒は含まれず、焼成は平歛である。47は弥生土器の底部片である。48は口径15cm、器高2.3cmに復元できるもので、内底面は手すりによって平滑になっている。49は一部を除いて復元することができたもので、11径14.8cm、器高4.5cmを測る。口縁部の外傾度が強く、高台は太めのものが外に強く踏ん張る形で付けられている。51は口径16.9cmに復元できたものであるが、体部が浅く有台皿に位置付けが可能なものである。高台は板状のものを張り付けて押し潰したような形で成型されている。52は口径14.9cmを測る小甕で、器表面は横方向、内面は斜め方向のカキ目調整が施され、口縁部と内面の上半分は横撫でてとのえられている。胎土には砂粒が多く混和され、焼成は良好である。内外面ともに炭化物の付着が認められる。

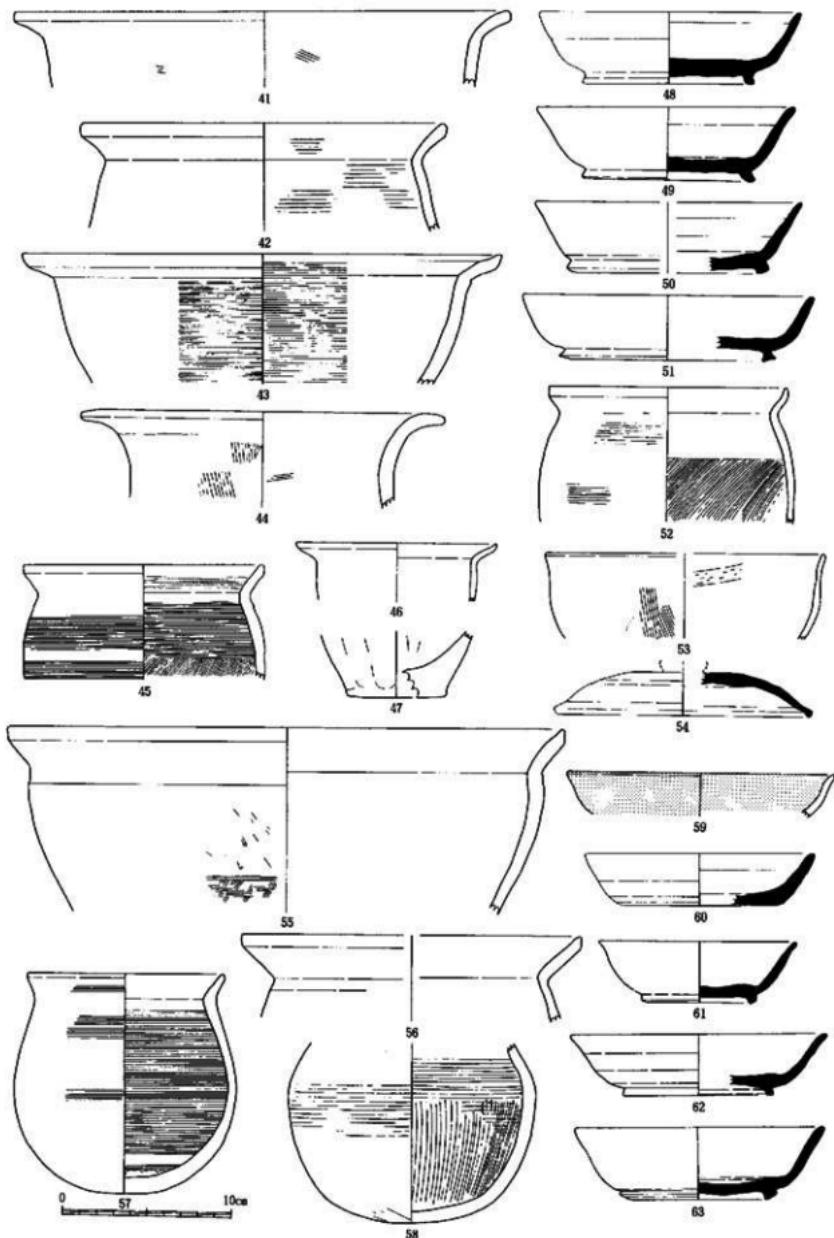
53・54は第6B号土坑から出土したものである。53は小片で、口縁部が小さく外反する器形として図示したが、小甕の口縁部を欠損した体部断片の可能性が考えられるものである。

55は第7号土坑から出土した土師器鍋形土器である。口径32.6cmに復元されるもので、カキ目調整は体部の下半分に施されているようだ。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。

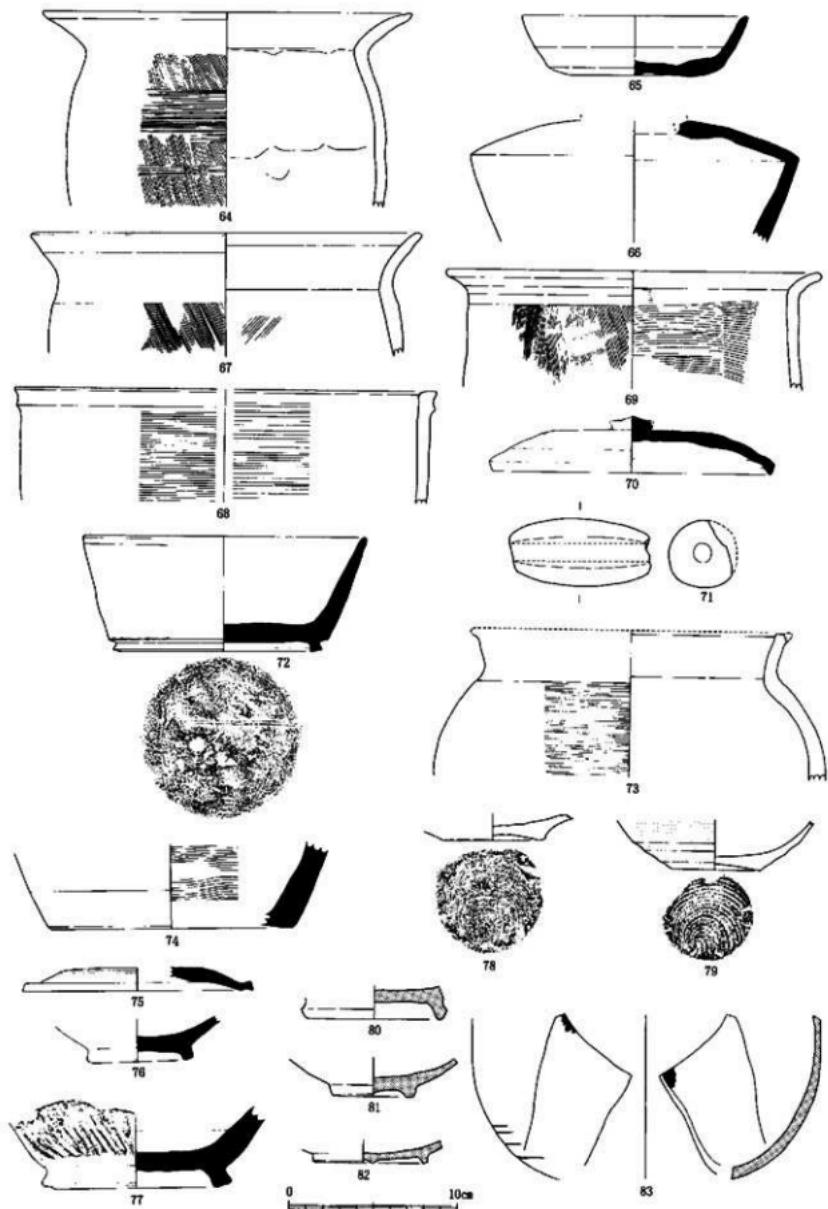
56～58は第9号土坑から出土したもので、57は口径11.6cmに復元できた。ゆるく外反する口縁の端部を直立させて立ち上がらせている。体部の内面はカキ目調整が観察できるが、器表面は磨耗のため全く不明である。橙褐色を呈しているのは、二次的火熱によるものであろう。

59～63は第10号土坑から検出したものである。59は赤彩土器の杯である。赤彩土器は第8・9・12号土坑でも断片が出土している。61は口径13.3cm、器高3.7cmを測るもので、外傾する口縁部と底部との器厚の差は小さくなっている。口縁部と体部の内面の境が溝状に窪んでいる。胎土には微砂粒が多く混和され、器表面はザラついた状態となっている。63は外底部面にヘラ記号が一条の沈線となって入られている。

64・65は第12号土坑から出土したものである。64は口径20.7cmに復元されるもので、外周は刷毛目調整が、内



第23図 土坑出土遺物(1) (1/3)



第24図 土坑出土遺物(2) (1/3)

面はナデ調整で整えられている。

66は第13号土坑から出土した長頸瓶の体部片である。

67は第14土坑から出土したものである。

68～71は第17号土坑からの出土品で、68は瓶の口縁部で、口径25cmを測る。内面のカキ目は粗く、外周は細かく施している。96は口径21.6cmを測るもので、強く外反した短い口縁部をついている。外面には指頭による稜線がついている。外周は縦方向、内面は横方向のカキ目調整が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を混和していない。焼成も良好である。70は口径16.2cm、器高3.3cmを測るもので、口縁部が嘴状に直に立ち上がっているために、器高が高くなっている。天井部のケズリはほぼ中程まで入れられナデ調整で整えられている。灰色を呈し、砂粒は含まないが器表面はザラついている。71は長さ8.3cm、径4cm、現状での重量144.4gを測る、土鍾である。

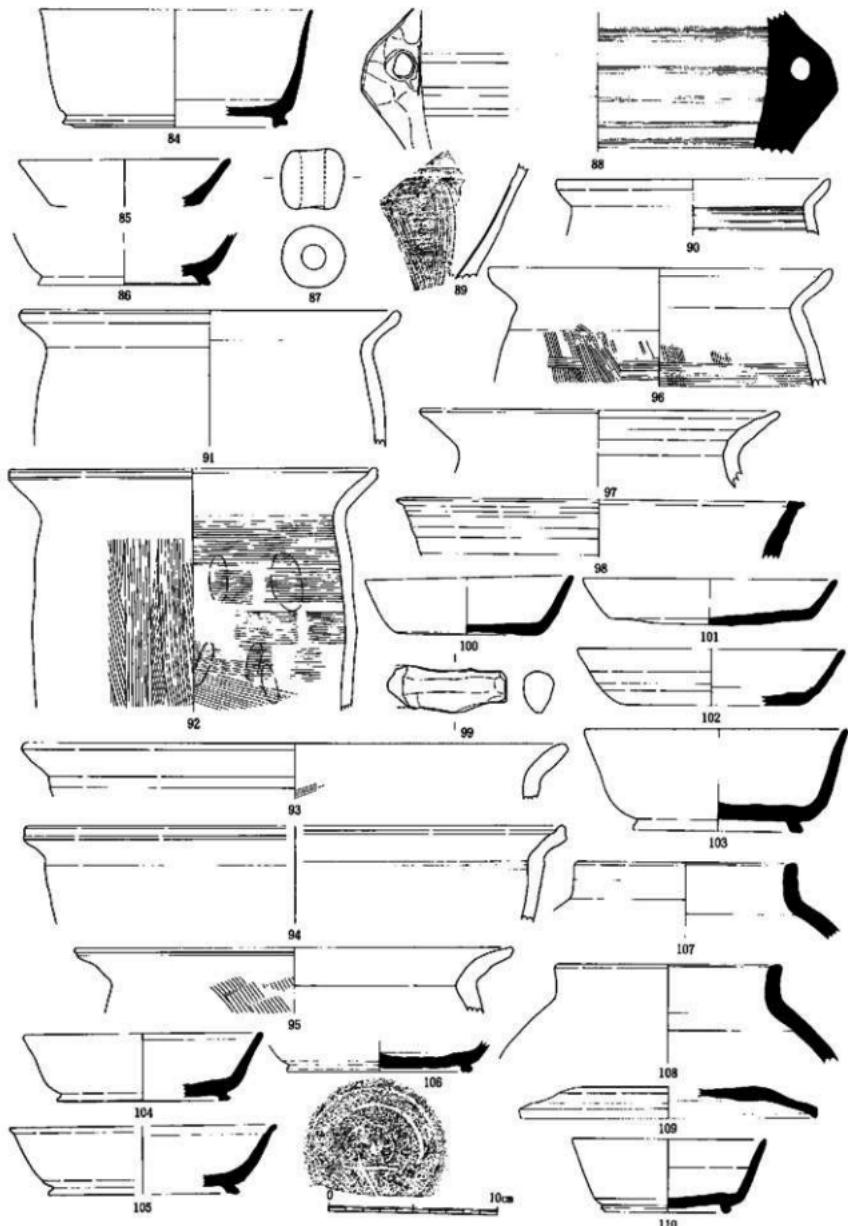
72は第20号土坑から検出した大型の有台杯である。第20号は5A号住居址の西に隣接する小土坑で、1点だけの出土であった。口縁部の一部だけを欠損しているもので、口径16.5cm、器高6.8cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、器表面の凹凸はほとんど認められない。内底面は平滑ではなく、凹凸が見られる。外底部には一文字のヘラ記号がつけられている。淡灰色を呈し、胎土には砂粒は見られない。

溝 73～83までは第1A号溝からの出土品である。73は肩部の張らない直口壺で、口径約19cmに推定される。体部は横方向のカキ目調整が、内面の叩き圧痕はナデによって擦り消されている。74は底径14.2cmを測るもので直口壺ないしは双耳壺の底部片に想定される。75は嘴状に長い口縁部を持つ、口径13.1cmを測る小型品である。76は高台径6.3cmのもので、口縁部は緩やかに外傾して立ち上がっていいるもので、時期的には平安時代に位置付けられる。77は人型の瓶、壺類の底部片と推定される。78・79は底面に糸引き圧痕をつける土器器で、橙褐色を呈して焼成は良好である。79には赤彩が施されている。80・82は灰釉陶器であろうか。81・83は釉薬を掛けた近世の陶器である。

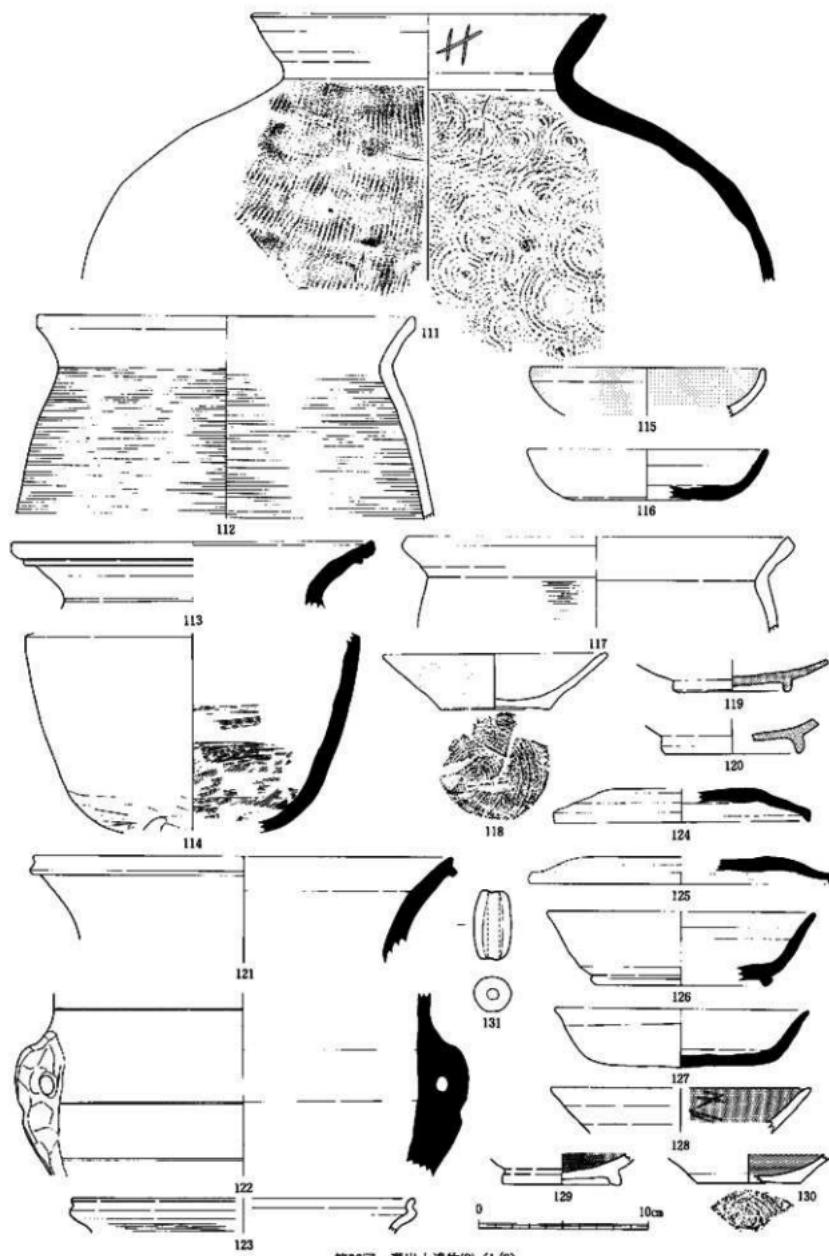
84～87は第1B号溝から出土したものである。84は口径16.1cm、器高7cmの大型品で、全体に薄手の作りとなっている。体部の中程に1条の沈線が施されているようだ。85・86はともに口縁部の外傾が強くなるタイプである。87は長さ3.6cm、径3.7cm、重量39.4gを測る。

88・89は第1C号溝からの出土品で、後者は近世の陶器である。88の双耳瓶の耳の下端部は肥厚していることから、穿孔は1個のものと推定される。

90～110までのものは第2A号溝からの出土品である。91は口径22cmに復元されるもので、口唇部は段を形成せずに丸く整えられている。全体はナデ調整で整えられ平滑で、カキ目調整は胴部下半部になされているのであろう。淡赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。92は口径21.5cmに復元されるもので、口縁端部は段を形成し、口唇部を若干摘み上げるような形で延ばしている。内面は口縁部まで含めて横方向のカキ目調整を施している。灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く混和している。94の口縁部は段を形成し、口唇部を摘み上げるような形で整えることから、内面および段に溝状のものが巡る形となっている。胎土は精選されているが、器表面は磨耗が進んでいる。95は外反する口縁端部に1条の沈線を巡らしているもので、内面の頸部以下には横方向のカキ目調整が施されている。96は口径20cmに復元されるもので、口縁端部をやや上向きに成型している。橙褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。97は茶褐色を呈し、胎土に多くの微砂粒を混和させたもので、口径20.8cmに復元される。口縁部の内面にはナデによって稜線が浮き出ている。98は平鉢の口縁部に推定したが、広口壺の口縁部の可能性も考えられる。99は土馬の足に推定されるもので、現状での長さは7.1cm、幅2.4×2.0cmを計測する。全体にヘラケズリによって形を整えている。淡黒褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。100・102は薄手の作りで、色調も灰白色を呈して、焼成がやや軟調である。101は口径14.6cm、器高2.8cmを測る、皿器形に推定してのもので、口縁部に重ね焼きの痕跡が見られる。103は口径14.9cm、器高6.2cmを測るもので、外底面には回転ヘラケズリが施されている。105は胎土に大粒の石英を含んでいるが緻密で、断面の色調も他のものと異なり淡褐色を呈している。口縁の端部を摘み上げて小さく外反させているのは、同器形には見られない特徴



第25圖 磚出土遺物(1) (1/3)



第26図 考古出土物(2) (1/3)

である。107・108は短頸壺の口縁部で、口唇部を丸く整え内傾気味に立ち上がらせている。口径は12.5・12.8cmに復元される。110は薄手の作りで、外底面に一文字のヘラ記号が施されている。器表面は手ずれによるものか平滑になっている。

112・115は第2B号溝から出土したもので、ともに、遺存状態は不良である。

111は第2C号溝から一括で検出した大甕で、口径20cm、胴部41cmに復元できた。器壁には気泡があるために凹凸が目立つことが多い。口縁の内面にはサの字状のヘラ記号が付けられている。

113・116は第3A号溝からの出土品である。

114・118は第3B号溝からの出土品で、114は体部で大きく屈折していることから瓶類と考えられるが、底部が丸底となっていることから確定はできない。118は口径13.2cm、器高3.3cmを測る上部器体で、外面に赤彩が施されている。なお、内外面の一部には炭化物の付着が見られる。色調は黄灰色を呈し、胎土は精選されているが、器表面はザラついている。焼成は堅密である。

117・119・120は第4A号溝から出土したものである。119・120は灰釉陶器である。

121～131は第4B号溝から出土したものである。122は双耳壺の胴部片で、径22.5cmに復元できた。耳の穿孔は1個だけと考えられる。色調は灰青色を呈し、胎土に散砂粒を多く含んでいるために、器表面はザラついている。焼成は良好である。123は小片の為に口径は不明であるが、平安時代後期の特徴を示す壺の口縁部である。

126・127の口縁部はやや外傾度が強く、端部でさらに外に伸びる形となっているのが特徴としてとらえられる。

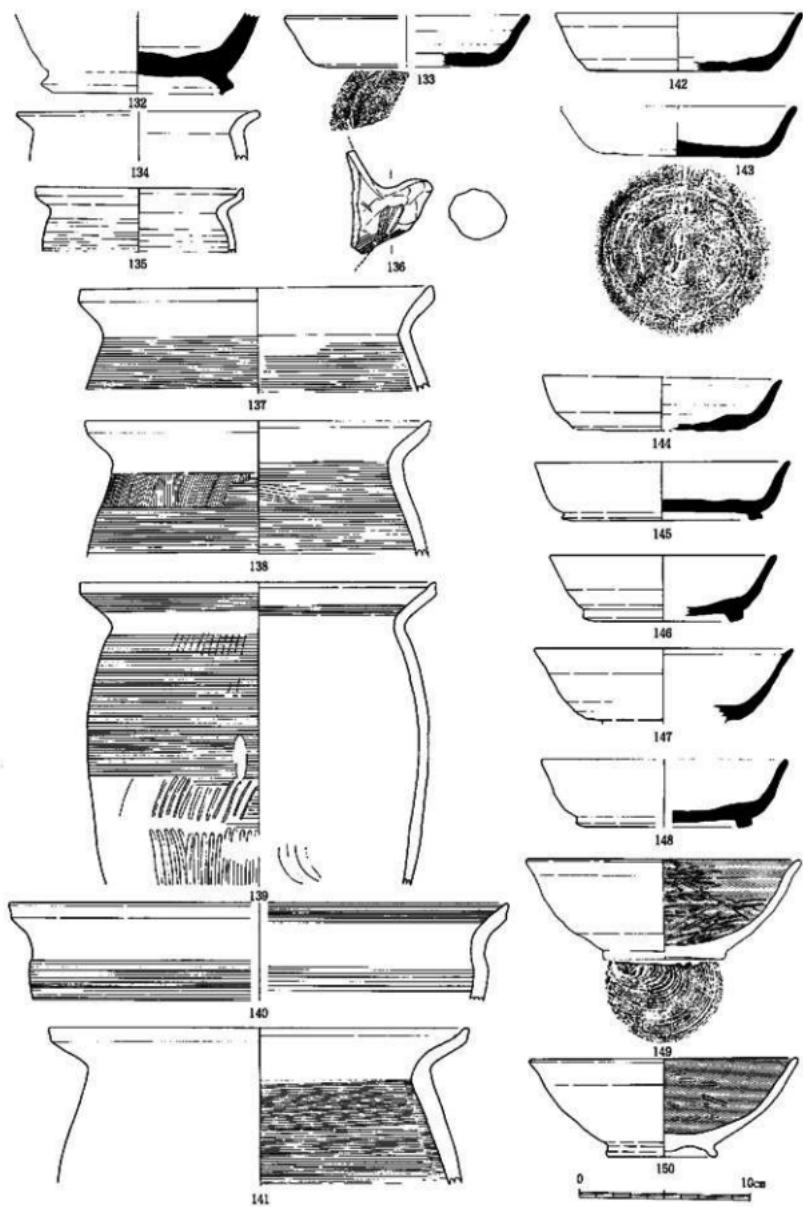
129・130は内黒土器で、後者は器表面に赤彩が施されている。131は長さ4.1cm、径2.2cm、重さ17.7gを測る完形品である。

132は第4C号溝、133は第7号溝から得られた。

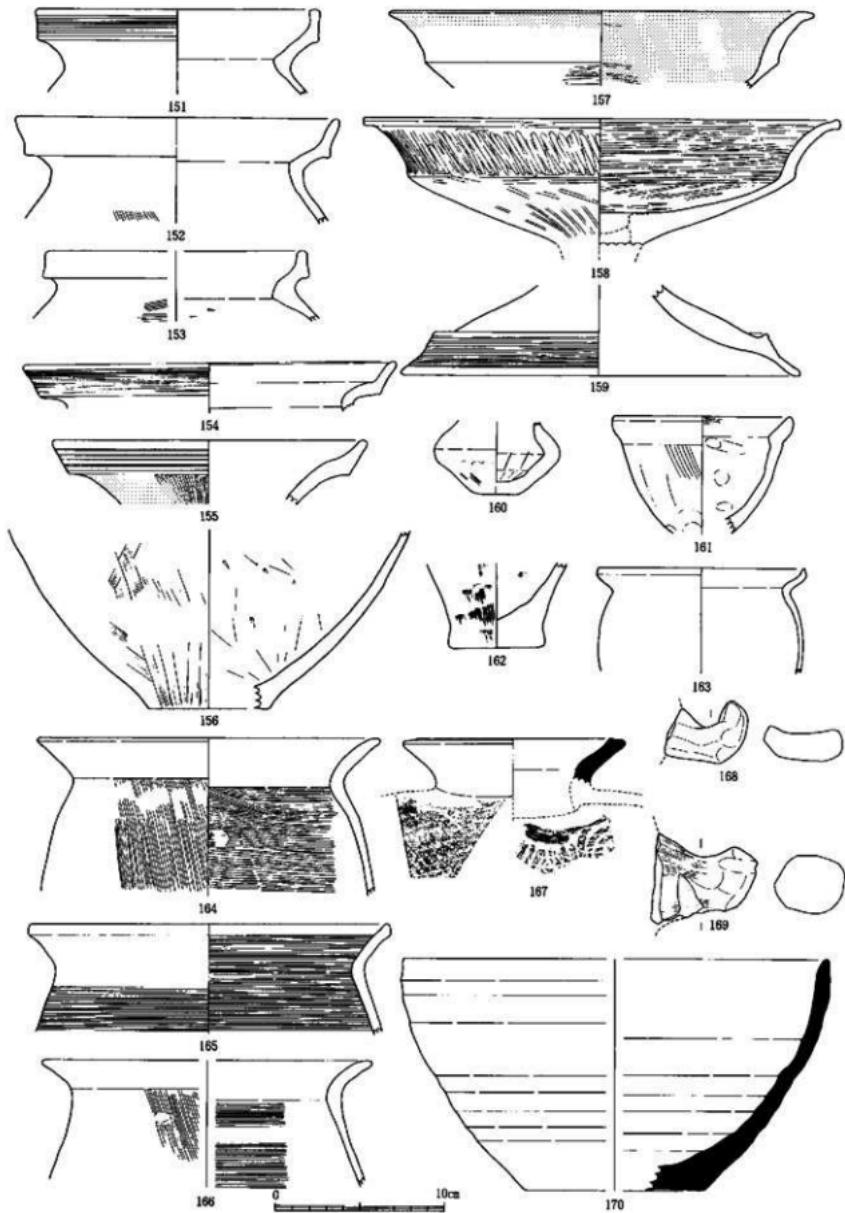
柱穴 134は第5A号住居址の北に位置していたP6から出土したもの。135は第7号住居址の北に位置するP59から得られたもので、口径12.2cmを測る小甕である。口縁部の端部を上に引き上げる形で成型し、内外面ともやや粗いカキ目調整を施している。136は瓶の把手で第2号住居址の西側で検出したP44から出土したものである。137は第13号住居址の東端に位置するP169から出土した。138は第9号住居址の南方に位置するP207からのものである。口径20.4cmを測り、器表面に煤の付着が認められる。139は第2号住居址のカマド脇のP217から出土したもので、口径21.1cm、現器高18cmを測る。体部全体に叩き調整を行い、上半分にカキ目調整が施される。内面は叩きの痕跡が見えないほどに横ナデが入念に入れられ平滑になっている。胴部下半には煤が付着している。灰黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。140・142は第1号掘立柱建物の柱穴P221・P39から出土したものである。140は口径30cmに復元される鍋形土器と推定される。141は第6号十坑と第10号土坑に狹まれた位置にあるP225から出土した。全体に磨耗が進んでいて細かな調整は不明である。143・144は第3号住居址の南で検出したP96から得られた。143は口縁の一部を欠いているだけで、口径13.8cm、器高3.2cmを計測する。内面は撫でによって凹凸があり、中央部が盛り上がる形に成型されている。外底面には×印のヘラ記号が入れられている。145は第12号住居址の南コーナーで検出したP165から出土したもので、口径14.9cm、器高3.5cmを測る。有台壺としては高さが低く、有台盤の可能性がある。口縁部には重ね焼きの痕跡が見られる。

146は第5A号住居址の北で検出したP6から出土している。147は第4号住居址の東に切り込んでいるP223から出土したもので、口径15cmに復元できる。口縁端部が小さく外反する成型で、全体的に薄手に作られている。器表面は落灰を受けて、暗灰褐色に変色している。148はP209から出土したもの。

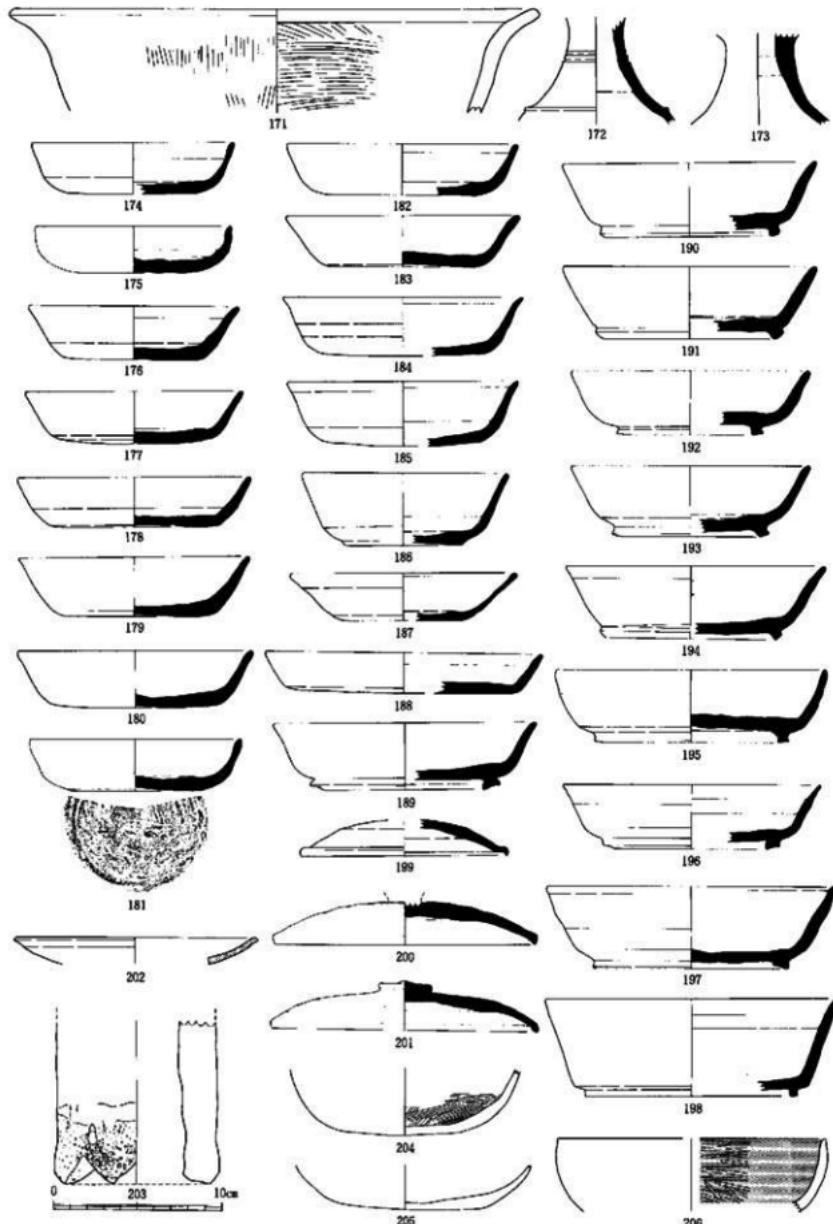
149・150は第5号掘立柱建物を構成する柱穴P227から折り重なるようにして出土したものである。149は口径16cm、器高6cm、底径7cmに復元されている。口縁端部を外反させてゆるい屈曲を作り出している。底部はケズリだしたような形で成型している。内面は入念にヘラ磨きがなされ、内黒としている。口縁外周の一部に煤の付着が見られ、それと対をなす形で内面もやや変色していることから、灯心油痕の可能性が推定される。胎土は精選されているが、金雲母が見られるのは他の類似品に見られない特徴である。150は口径15.6cm、器高5.9cm、高台径6.2cmを測る。高台はやや貧弱なもので、底面は指押さえの状態が遺存している。内面の黒色は変色したの



第27図 柱穴出土遺物 (1/3)



第28圖 包含層出土遺物(1) (1/3)



第296图 包含层出土遗物(2) (1/3)

かやや茶褐色がかっている。

2 包含層出土遺物（第28・29図）

151～162は弥生時代後期に位置付けられるもので、151～154は壺形上器の口縁部に想定される。151は口径16.6cmに復元されるもので、口唇部は面取が施されて、わずかに肥厚している。頸部以下にはヘラケズリが入らされている。152は口径18.8cmを測るもので、口縁部の下端が突帯状に突出している。全体に横ナデ調整が施され、器表面には砂粒は目立たない。色調は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。155は口径18.3cmに復元されるもので、頸部に赤彩を施した痕跡が見られる。壺形器を想定した。胎土には多量の微砂粒が混和されている。157・158はともに口縁が外反して端部の肥厚する高杯で、前者には赤彩が施されている。後者は口径27.8cmを測る大型品で、内面は丁寧なヘラ磨きが入れられ、胎土、焼成とも良好である。159は器台の台部に想定したもので、外面とも磨耗が進行している。口縁部の凹線は3本單位で巡らすもので、やや粗雑に引かれている。灰黄褐色を呈し、胎土、焼成ともやや不良くない。160は口縁部を欠損しているが、ほぼ完形を保って出土したものである。胴径7.4cmを測り、胎土は壺形土器に類似した在り方を示している。161は口径は10.3cm、現器高7cmを測る。

164～166は口径20cm前後に復元できるもので、口縁に段を形成する165が後出するものと考えられる。段を形成するものは、体部の調整が横方向だけとなるものが目立ってくるようだ。167は横瓶の口縁部で、口径11.4cmを測る。口唇部は平坦面を取って内側を立てるように成型している。横へ伸びる体部の内面は、横ナデ調整によつて整えられる。体部にはかすかに叩き圧痕が認められ、口縁と体部の接合部分では顯著に遺存している。170は口径約25cmに復元される鉢で、全体に磨耗が進行していて詳細な調整はつかめない。体部の上と下との器厚が大きく異なり、段を形成している。内底面では使用による磨滅が見られ平滑になっている。灰色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されていて、焼成はやや甘いようだ。172・173は高杯の脚部片で、前者は沈線や突帯を巡らしていることから、古墳時代後期の可能性が考えられる。図示できなかったが、返しを持った杯の断片も出土している。

174～187までは須恵器の杯で、175は口径11.5cm、器高2.7cmを測るもので、口縁部が内屈して立ち上がっている。底部はヘラ切り痕が顯著に見られる。色調は暗青灰色を呈するが、断面は暗茶褐色を呈していることから、古墳時代の所産が推定される。181・186は底部が段状に成型されて、体部と底部の境界がはっきりとしているタイプとなっている。186は口径12.1cm、器高4.4cmを測るもので、杯としては深めの作りとなっている。

187は口縁部の外傾度が強くなり、全体に薄手の成型となっているもので、口径13.2cm、器高2.8cmを測る。口縁部には重ね焼きの痕跡が顯著である。平安時代のものであろう。

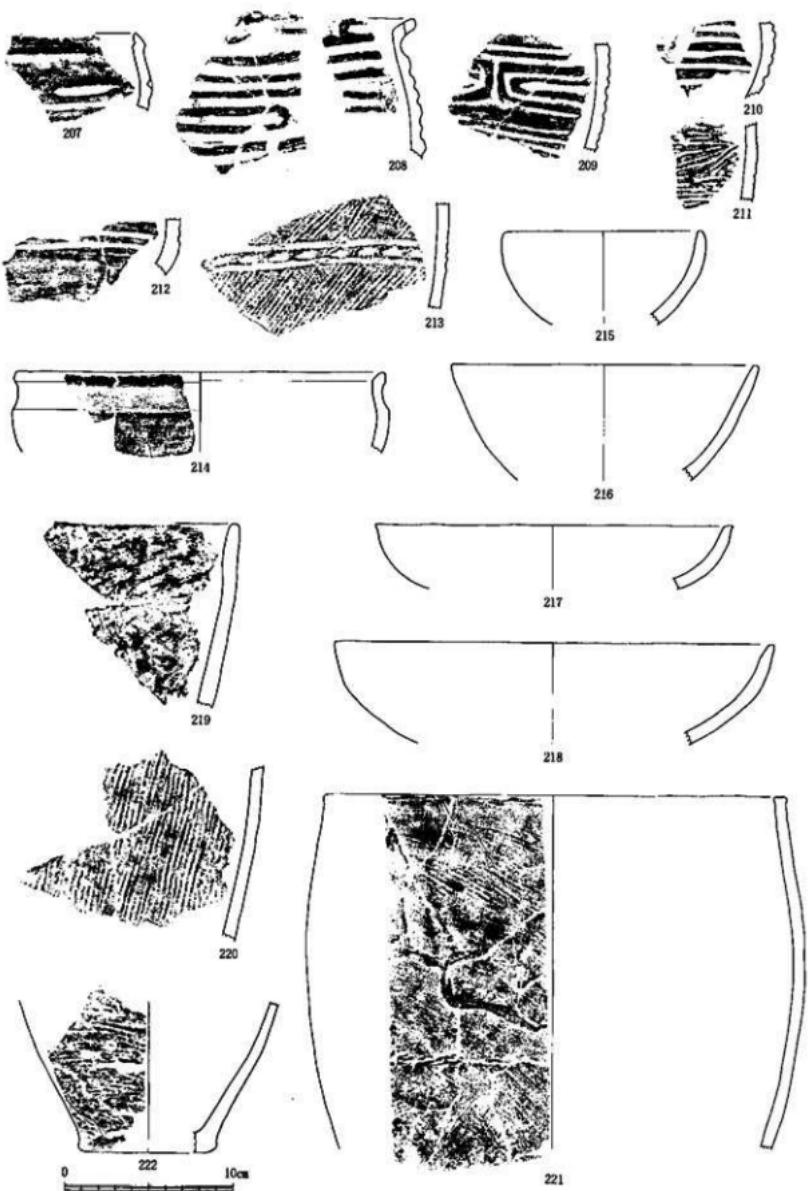
188は皿形器で、口径16.4cm、器高2.4cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、胎土は精選されている。全体に丁寧な横ナデ調整が施されている。

189～198は有台杯で、体部と底部の境界が明確になっている191、194、198や、高台が外へ踏ん張る形となっている191、193、194、太めの高台となっている189、194、197などを特徴を持つものとして上げられる。195は口径15.8cm、器高4.3cmを測るもので、口縁部は内弯気味に立ち上がっている。197・198の色調は灰白色を呈し、焼成はやや軟調である。

199は口径12.2cmの小型品で、嘴状の口縁が付けられ平坦面を形成している。灰青色を呈し、胎土、焼成とも良好である。200は体部に傾斜の変わることろを作らずに、立ち上がっていくものである。201は口径19.5cm、器高2.9cmを測るもので、径3.2cmの宝珠形のつまみが付けられている。器表面全体に厚く灰釉が掛かり、荒れている。

202は縦軸陶器で、205X190Yグリットで検出した。断片としてはもう一点の検出がある。口縁端部は若干溝状になるが、器表面全体に丁寧なケズリ調整がなされているようだ。地色は暗灰色を呈し、胎土は精選されている。

203は径9.5cm、内径5cmを測る大型の羽口である。胎土には砂粒は全く含まず、内側は淡褐色、外側は灰黄褐色を呈している。

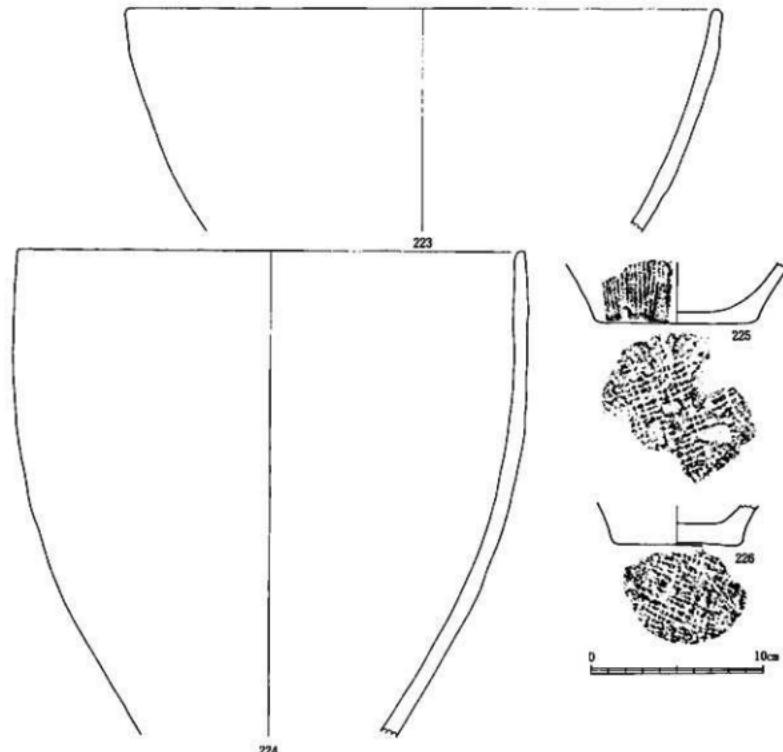


第30図 魁文土器(I) (1/3)

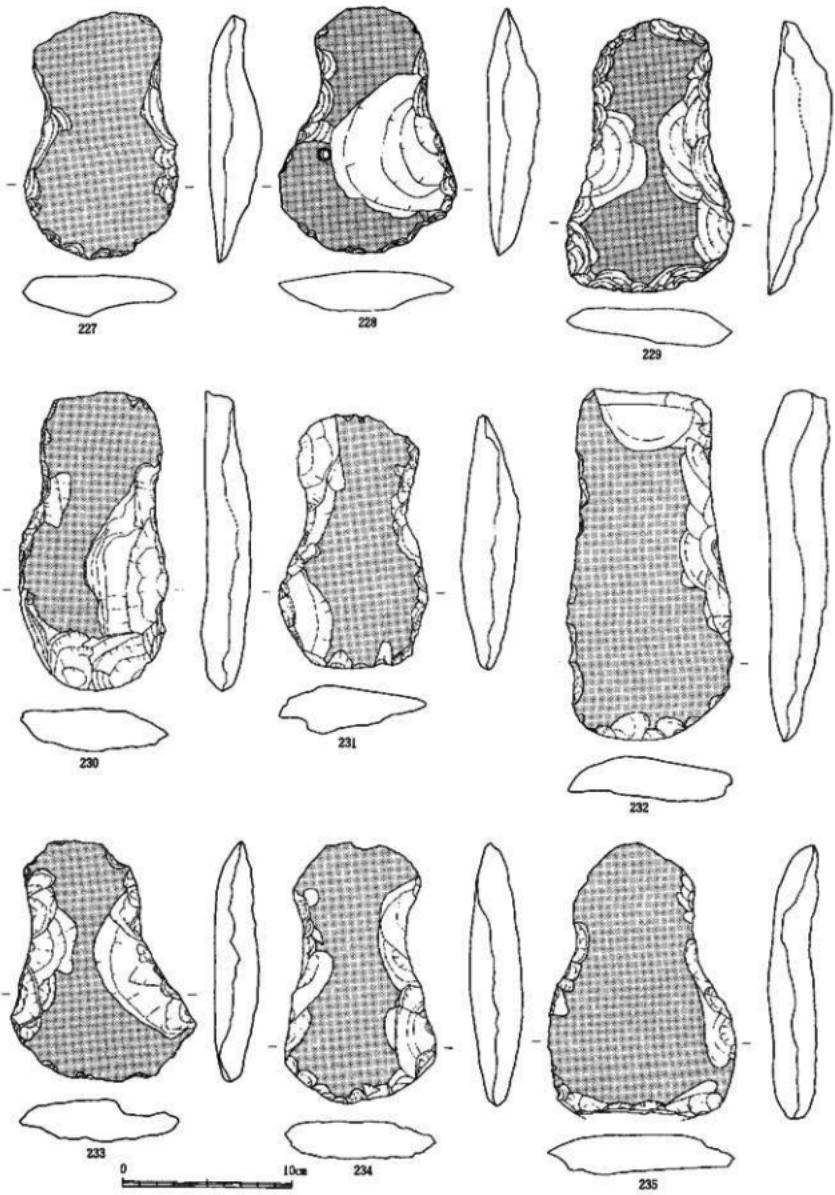
3 繩文時代の遺物 他（第30～32図）

縄文時代の遺物は、調査区の北東部と河道跡の肩部からの出土に限られ、量的には多くなく遺構の検出もなかった。所産時期としては、晩期後業の長竹式土器の範疇を越えない段階に位置付けられる。

207は鉢形土器の口縁部で、口縁内側に沈線をつけて外側に肥厚し、口縁帯は無文である。眼鏡状隆帯は形態化していて、沈線を深く施しているだけである。208は口縁部分が少なく、器形的には判断に苦しむものである。口唇部は面を取って広く、突起が付けられる。沈線の幅は広く、工字文を構成するものであろう。色調は暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも普通である。209は体部片で、赤彩された痕跡が微かにみられる。沈線は浅く、やや粗略な施文である。内面は丁寧にナデ調整が施されている。210はやはり赤彩痕が残る胴部片である。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。211は発掘区の中央部、畝溝から検出されたもので、単独出土のものである。器壁は比較的薄く作られ、細く深い沈線が細かく施されているが、文様は判断できない。暗褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。赤生土器の可能性も考えねばならない。212は鉢器形の胴部で、引かれた沈線の溝底には筋が認められ、禾本科の工具を使用した可能性が考えられる。213は胎土に散砂粒を多量に混和した深鉢の胴部である。沈線と列点文の構成は下野式土器以降の特徴である。溝底にはやはり筋が認められる。灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。



第31図 縄文土器(2) (1/3)



第32圖 打制石斧 (1/3)

214は口径22cmに復元されるもので、口唇に面を取って肥厚させ、頸部を幅広く窄ませている。内外面とも丁寧にナデが入れられている。器表面には煤の付着が見られる。215～218は無文の鉢形土器で、口径11.6cm、18cm、21cm、26cmをそれぞれ測る。215の器表面には軽いケズリ調整が見られ、216は内外面とも人念に磨きが施されている。219は無文の深鉢、220は条痕調整の深鉢の剥部片である。221は口径27.4cmを測る深鉢で、口唇には押圧列点が施され、体部には數かに条痕調整が残っている。222は横方向の条痕が見られるもので、網代圧痕が遺存している。223は口径35cmの大型品で、内外面ともケズリ調整が施されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。体部下半分には煤が厚く付着している。224は口径30cm、現器高28cmを測るもので、下から9.5cmまでは煤の付着が見られないが、その上11cmの範囲は付着が顯著である。器表面は横ナデの後に斜め位置に軽くケズリが、内面は稜線が出るほどに強いケズリが施されている。208、221とともに河道跡肩部からの出土である。

打製石斧の出土は37点を数え、全体に広がる形で出土しているが、量的に多いのは縄文土器のあった河道跡と発掘区の東北部である。石材は全て手取扇状地で通常に見られる火山礫凝灰岩、砂岩などである、前者が大部分である。形態的には刃部が広がって丸く、頸部が括れているものが大部分で、短冊形のものは4点を数えるに止まる。短冊形のもので図示した232を除いて小型品である。その他の石器では、石鎌1、叩き石1、磨石1、凹石1が出土している。古代の石器としては、低石が2点出土している。2A溝からは575gを量る鉄滓が1点出土している。また、東北部で寛永通宝1点の出土が見られる。

V まとめ

北安田北遺跡は、第4回調査までに20,000m²を大きく越える範囲で発掘調査が実施されているが、遺跡そのものは30,000m²を越えるものと推定される。平成元年度までに検出された遺構は竪穴式住居址、掘立柱建物跡がそれぞれ100棟近くにもなり県内屈指の古代の集落遺跡である事が判明した。本遺跡から南方方向に指揮の距離に位置していた法仏遺跡でも、奈良時代の竪穴式住居址40棟余、平安時代の掘立柱建物跡64棟が検出されている。さらに、本遺跡の調査に引き続いて実施された法仏遺跡南地区の発掘でも検出遺構は少なくなるものの、ほぼ同時期の竪穴式住居址群、掘立柱建物跡群が認められていて、個々の調査での集落の性格付けは、法仏遺跡群全体の中での位置付けを含んで考えなければならないようだ。第3次調査の発掘面積は約3,100m²であり、出土した遺物は少量でもあり、全体的な変遷と意義付けは先に委ね、ここでは概略を記してまとめとしたい。

縄文時代の土器は、河道跡と調査区の東北地区の限られた地点での出土が認められただけで、遺構などを確認することは出来なかったが、出土状況から扇状地先端部での在り方に興味深いものが知られた。時期的には縄文時代晩期の下野式土器の範囲に含まれるもので、眼鏡状隆帯が形骸化していることや横円形工字文に近いものが見られることから、下野式の新しい段階が想定される。粗製土器では無文化が進んでいて、鉢、浅鉢、深鉢それぞれに認められた。出土した石器は限定されていて、打製石斧、石鎌、磨石が見られたにすぎないが、打製石斧は日立って多く、それはほど大型化していないことから当時のものと推定しておきたい。無文の深鉢が一括で発見された河道跡は縄文時代から流れていたもので、弥生時代後半以降に埋没したものと推定される。河道跡の深鉢や北東地区での出土土器は、古代での遺構検出面より下位で検出され、黒色上のような明確な包含層としては把握できなかったことや時期的に限定される上器の在り方などから、扇状地扇端部での不安定な立地状況を反映しているものと推定され、短期間のキャンプ地的な遺跡と想定されるが、当時の集落址の範囲が現況では不明であることから今後の検討課題としておきたい。

弥生時代後期の住居址としては第1号住居址が想定される程度であり、発掘区の北東地区で古代の住居址、土坑、溝の覆上から散発的に小片となった土器の出土状況からも、調査区が弥生時代集落の中核部分からは距離を置いているものと推定される。弥生時代後期の標識的な土器を出土している法仏遺跡が南に隣接している事も留意しなければならない。調査区の南で検出した河道跡は、肩部に縄文土器が見られ、底面の小縫に混じって弥生土器が認められたことから弥生時代以降から奈良時代までの間に埋没した河道跡と考えたが、覆土の上層、下層には全く遺物が認められず、短期間の内に埋没した可能性が高い。縄文土器の出土状況から自然の河道であると考えられるが、河幅が一定で、肩部の傾斜や底面が比較的平坦である事などから、人手が加わっている可能性も考えられる。が、調査した範囲が狭いために、集落址との関係や流下方向が確定できず、周辺地域での今後の調査成果を待たねばならない。

古代の集落址は、竪穴式住居址、掘立柱建物跡、溝跡など多数が検出された。遺構の時期を特定する土器の出土は限られている為に、個々の遺構の変遷を辿ることは困難であるが、形態や配置状況から一定の流れを考えることはできる。

竪穴式住居址は複数棟がグループを形成していることは容易に見て取ることができ、北から第5号住居址群（3棟）、第2号住居址群（4棟？）、第11号住居址群（4棟？）の3グループを上げることができる。グループ内で切り合い関係を持つ第11号住居址群は2棟が単位となるのであろう。グループを成さないで単独に立地しているものは、第4・8～10号住居址の4例であるが、周辺の住居址と群を成すとともに可能ではある。また、住居址の場所の方向で見ると、北西方向になる第2・3・7号住居址と北東方向を取るその他に分けてみることができる。各住居址からの出土遺物では土師器の長轟が編年の機軸としてとらえられる。口唇部が丸味をもっておさめられ頬部以下の器表面が継位置の調整が見られることから、奈良時代前半で位置付けが考えられる。

小窓においても口唇部が立ち上がる傾向を示しているのはP59出土品と包含層出土の163と少數であるのも示唆的である。これらのことから新旧を見ると、北東方向に主軸を置く第5・8・9・11号住居址が古く、第7・10・12・13号住居址が新しい段階のものと想定される。出土遺物が少なく比定が困難である第2～4号住居址については、主軸方向から前2者が後出するものであろう。竪穴式住居址の平面規模では第4号住居址が最も大きくなっているが、集落全体の中での位置付けに留意しなければならない。

集落の始まりとして見た場合に、古墳時代後期の継続としての在り方をとるものは県下の該期の集落址の中では少ない傾向にあるのは、注意しなければならない問題と考えられる。

検出した土坑は20基を数えるが、竪穴式住居址の新旧に対応する形での位置付けが想定される。第2・6・7号土坑が新しく、第14・17号土坑が古くに考えられるが、その他については確定はできない。

掘立柱建物跡を確定できたものは5例を上げるに止どまり、所産時期を推定できるものは、さらに少數になる。第1号掘立柱建物跡は柱穴からの遺物で見ると、8世紀後半の時期に比定され、切り合位置の第2号掘立柱建物跡は土層による前後関係は把握できなかったが、隣接する時期が推定される。第3・4号掘立柱建物跡の所属時期は不明であるが、同じ主軸方位をとることから同時期の可能性が考えられる。さらに、第3号掘立柱建物跡が倉庫と見られ、第4B号溝に隣接している事に注意するならば、溝に類似する所産時期を推定することができる。第5号掘立柱建物跡は第4B号溝が埋没した後に位置付けられ、柱穴P227からは糸切り底を持つ内黒土器が出土していて、11世紀前後の所産と推定される。完形に近い土器數個体を柱穴に埋納する例は、輪島市三井小泉遺跡、小松市佐々木ノテウラ遺跡など県下で7遺跡が、本田秀生によって集成されている。8世紀から14世紀までの時期幅があり、1遺跡で数例の検出に止どまる傾向がある。出土は隅位置の柱穴での検出が多いが、規則的な在り方を示すとの判断はやや困難である。土器の出土位置は覆土の上層からと下層からの2様が見られ、土器は供耕形態のものが多いようである。掘立柱建物の廃棄に伴う祭祀行為の結果としての在り方を示しているようである。

本調査区の地区割りを規定しているのは、鏡形に折れて掘り込まれている第2A号溝と第4B号溝の2条の溝である。第2A号溝は調査区の東南部で再掘削を実施しているのが断面で確かめられているが、第4B号溝では確認することはできなかった。出土遺物はいずれも鏡形に折れている地区での検出が目立つ程度で、ともに平面規模のわりには少ないと見えよう。第2A号溝は竪穴式住居址群が配置されている時期に相当するものと判断されるが、流路の変更は第2C号溝を含めれば最低3回なされていることになる。直線的な北側の掘削の在り方を見るならば第11号住居址群を避ける形での変更であることが理解され、第2C号溝が最も古くなる可能性が高いと言えよう。第4B号溝は10世紀前後の時期に比定されるが、先の溝よりは規模的に大きなもので、本集落の中での中核的、計画的な位置付けが可能視されるが、その流路を大きく変えている地区においては旧河道路や後世の溝が錯綜するような形で集中していったために、検出できなかった中核的な建物群が位置していた可能性が高いと理解したい。第1A号溝からは古代の土器の他に近世以降と推定される陶磁器が出土しているが、歴史の一部が切り込んでいることに注意しておきたい。また、第1A号溝と切り合う関係にある第4A号溝は先行する形で検出したものである。

中世の輸入陶磁器の断片が散見されることから、周辺には該期の集落が営われていたことが推定される。

各時代の変遷を含めて概略を記述してきたが、出土遺物の統計的なまとめを行ってはいないものがあり、接近した時期での在り方の把握は不十分であり、今後に多くの課題を残していることは否めない。引き続いて実施された法仏遺跡の調査報告の中で再検討できたらと思っているが、北安田北遺跡の全体像は、松任市教育委員会の調査整理報告で明らかにされるだろう。

（参考文献）

- 古賀康編 1967 「加賀三浦遺跡の研究」 石川県・松任町教育委員会
中島俊一 1977 「松任市長竹遺跡発掘調査報告」 石川県教育委員会

- 湯尻修平 1978 「鹿島町徳前C遺跡調査報告(1)」 石川県教育委員会
吉岡康郷編 1983 「東大寺領横江庄遺跡」 松任市教育委員会・石川考古学会研究会
高瀬勝喜編 1983 「野々市町御移塚遺跡」 野々市町教育委員会
北野博司・本田秀生 1986 「佐々木ノテクラ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
平田天祐編 1986 「二井小泉遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1986 「漆町遺跡 Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人編 1987 「永町ガマノマガリ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター



航空写真（西から）



航空写真（北から）



航空写真



航空写真



航 空 写 真 (東側)



航空写真（西侧）



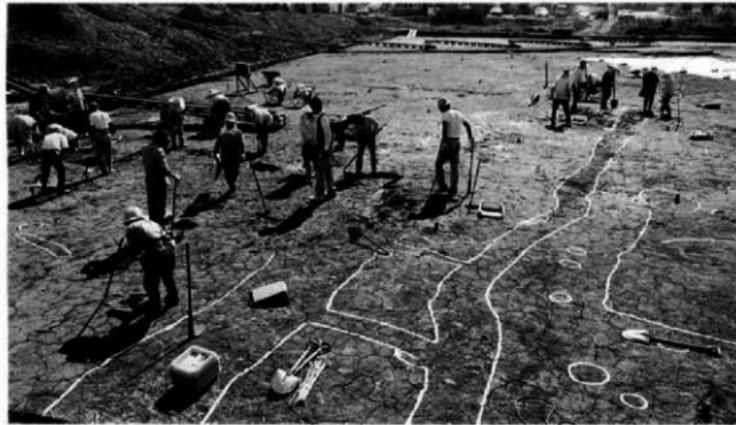
全 景 (北から)



全 景 (北から)



同上



同上



1号住居址



2・3号住居址



4号住居址と1・2号獨立柱建物





5号住居址



7号住居址

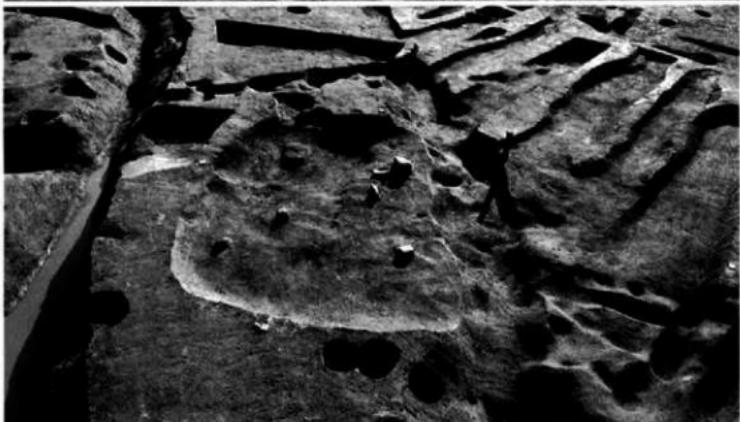


8号住居址

9号住居址



10号住居址



12号住居址

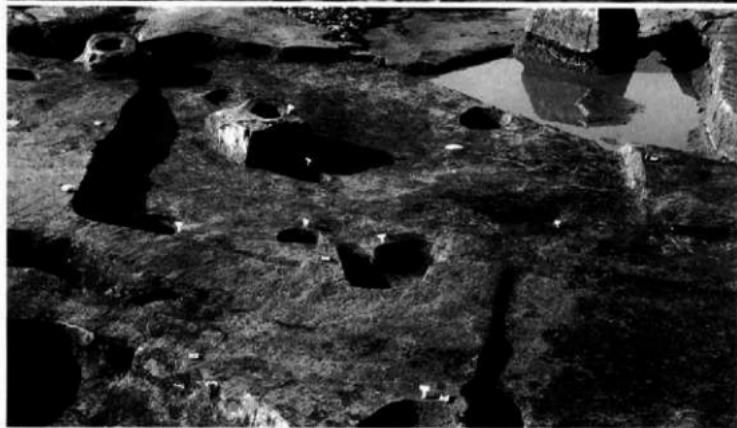




11號住居址

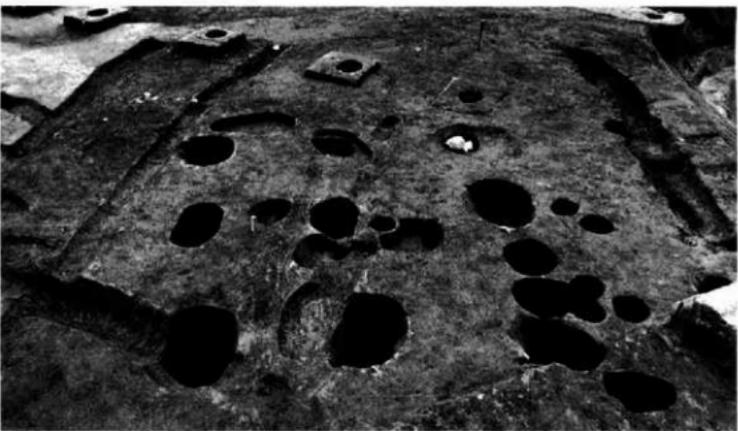


11-13號住居址



13號住居址

3号櫛立柱建物



4号櫛立柱建物



5号櫛立柱建物



柱穴2227

土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



第2号土坑



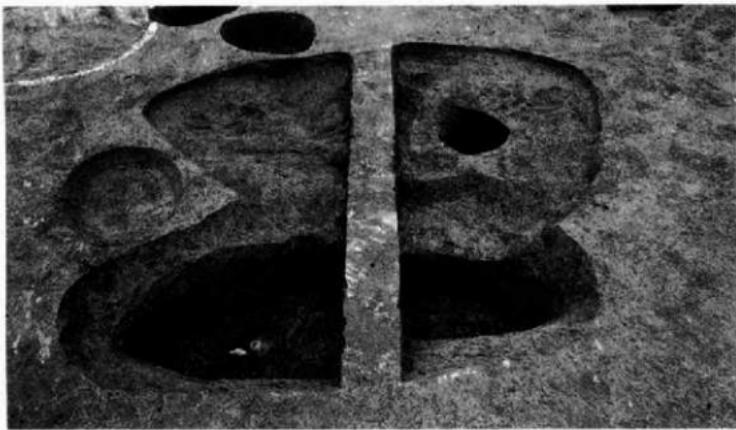
第3号土坑



第11号土坑



第五号土坑



第五号土坑



第九号土坑



第10号土坑



第14号土坑



第17号土坑



図
16



2A
溝

同上



同上断面

2A 漢



2B 漢斷面



2C 漢須惠器出土狀況





河道跡



同上断面



同上東部の縄文土器出土状況



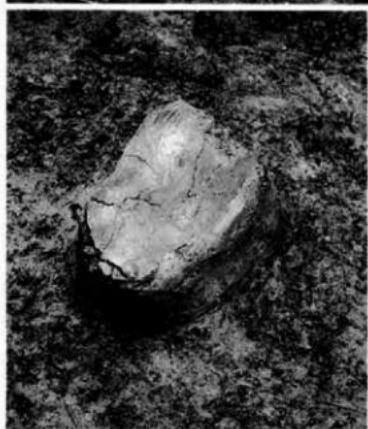
縄文包含層の発掘風景



同上 完掘状況



縄文土器の出土状況





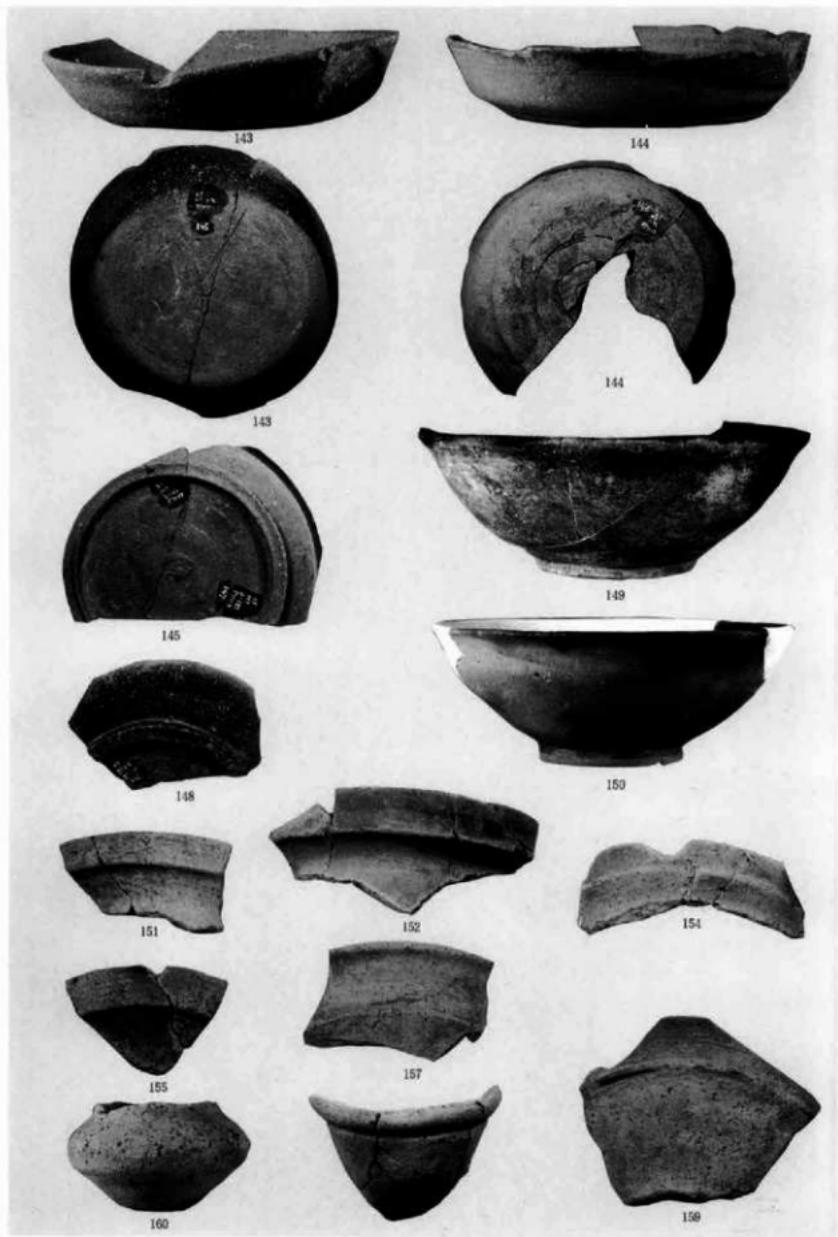
出土遺物(1) (4~49)



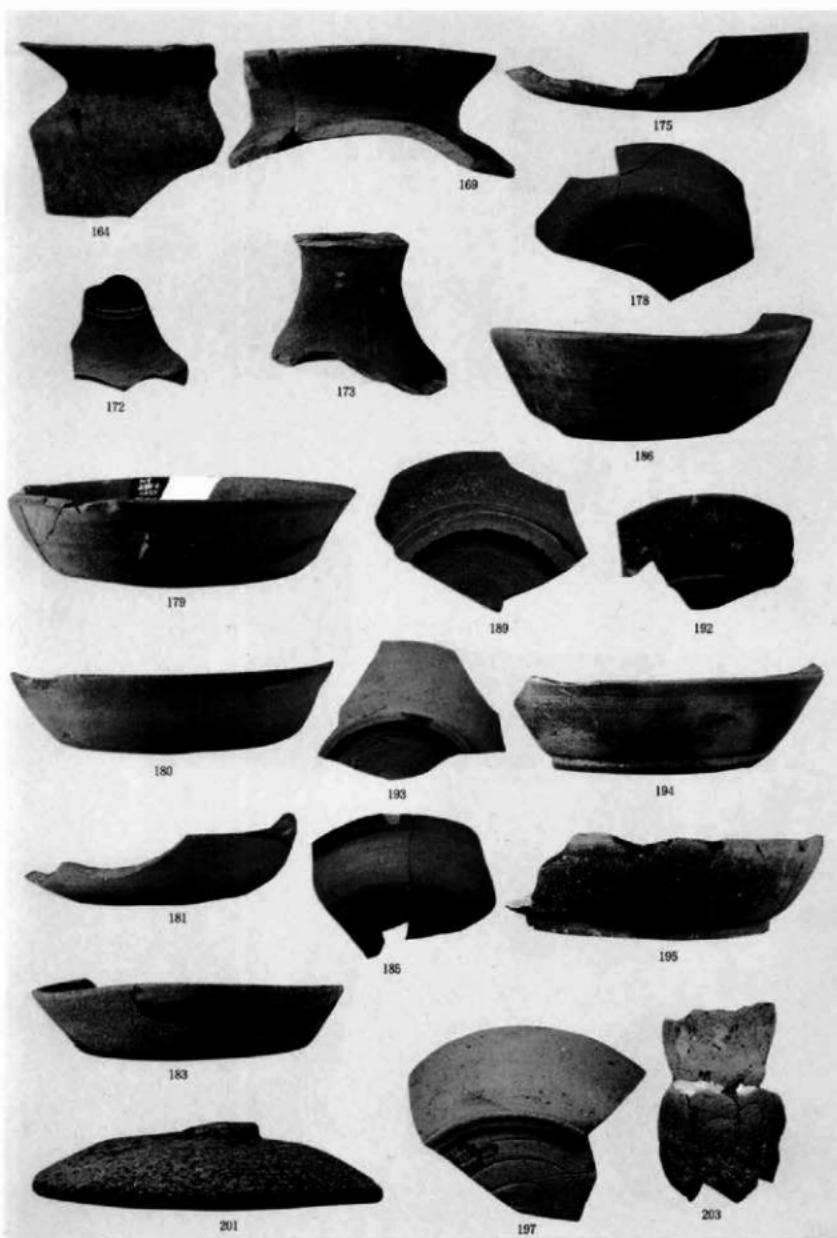
出土遺物(2) (52~112)



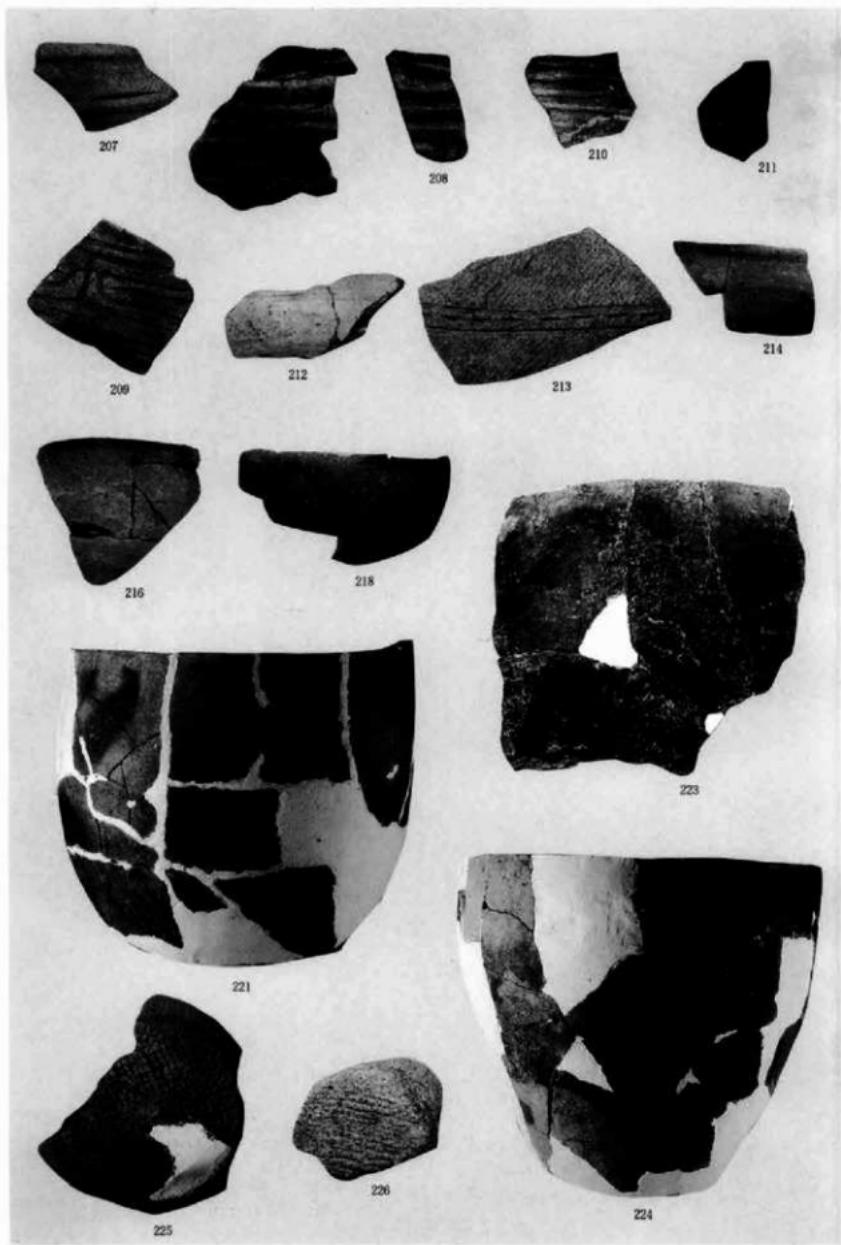
出土遺物(3) (88~139)



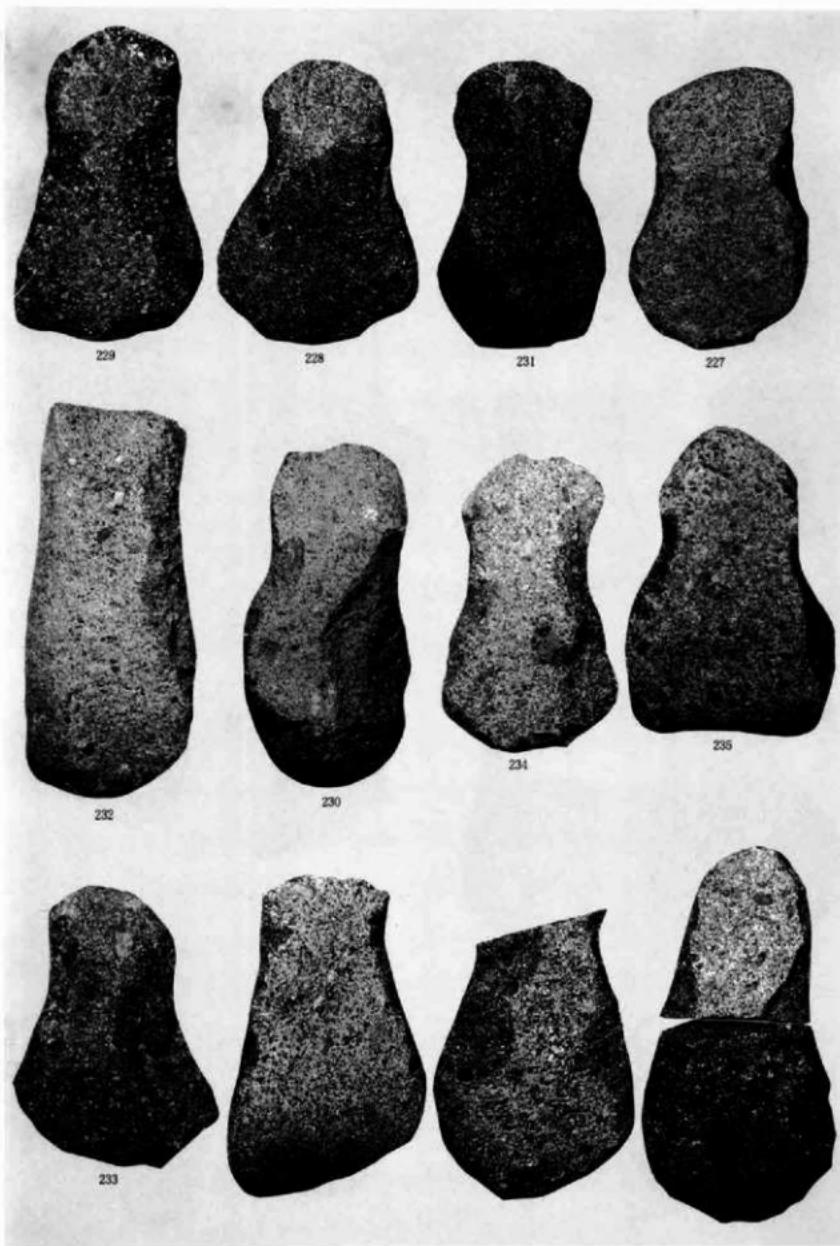
出土遺物(4) (143~161)



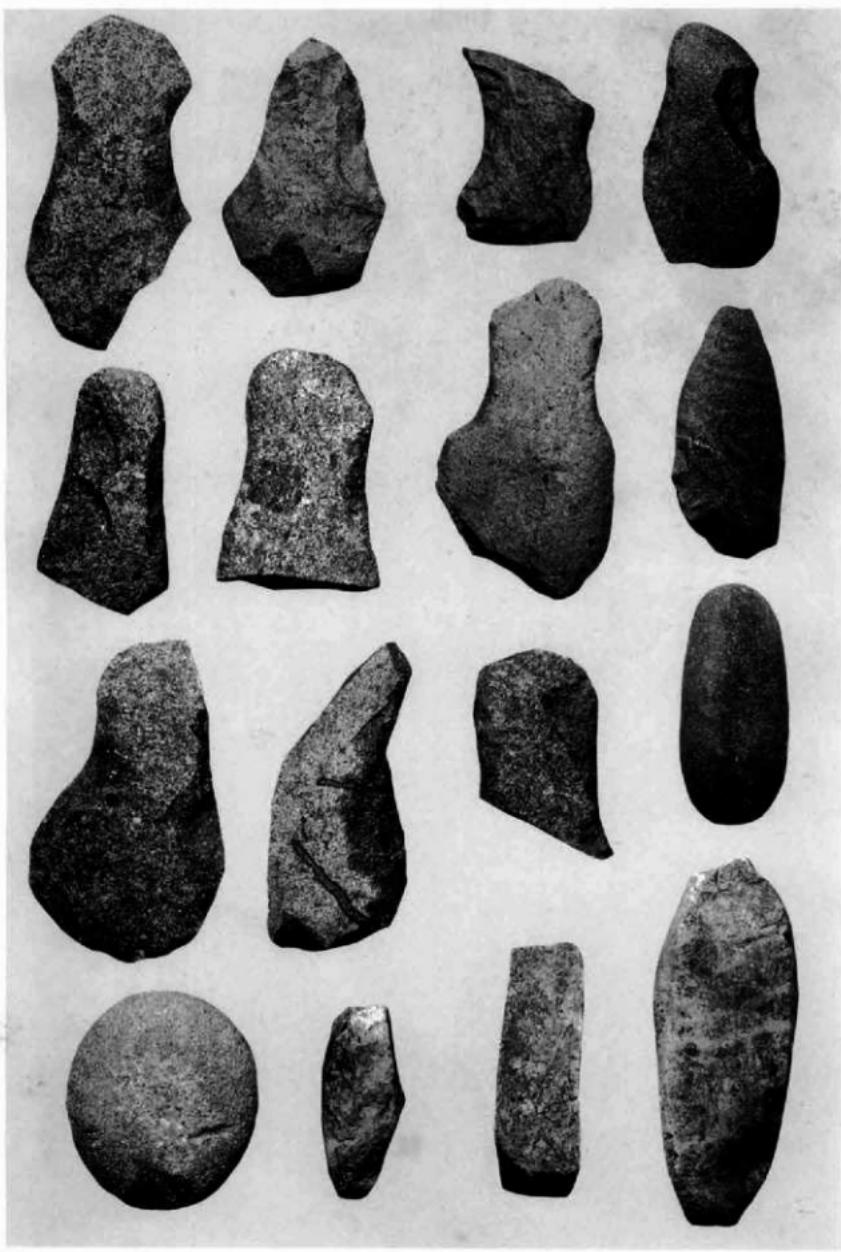
出土遺物(5) (164~203)



編文土器 (207~226)



打製石斧



打製石斧·砾石·他

松任市北安田北遺跡 Ⅲ

松任市千代野ニュータウン拡張工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告

平成2年3月20日 印刷
平成2年3月31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
〒921 石川県金沢市米原町4丁目133
電話 (0762) 43-7692番代
印 刷 能登印刷株式会社
〒920 石川県金沢市武藏町7-14
電話 (0762) 33 2550番代

北安田北遺跡(第3次)発掘調査平面図

